文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】
大学教育推進プログラム

プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～

PBL教育における多面的評価

—PBLは社会で役に立つか—

シンポジウム・レポート

2011年2月26日(土)
今出川キャンパス 明徳館1番教室

同志社大学 PBL推進支援センター

次 第

13:00 ■挨拶

土田 道夫 同志社大学 副学長 法学部 教授

13:10 ■第1部 提言

「大学教育に求めるもの」

海老原 嗣生

(株)ニッチモ代表取締役、人事経営雑誌『HRmics』編集長。1964 年生まれ。
大手メーカーを経て、リクルートエイブリック(現リクルートエージェント)入社。
事業企画や新規事業立上げに携わった後、リクルート ワークス研究所へ出向、
『Works』編集長に。2003 年よりリクルートエイブリック(現リクルートエージェント)にて
数々の新規事業企画と推進、人事制度設計等に携わる。人材育成学会理事。
専門は、人材マネジメント、経営マネジメント論。

松本 美奈

読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者。
教育ルネサンス「大学の実力-教育力向上の取り組み調査-」担当。

13:50 ■第2部 在学生による報告

「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」

報告1 2010 年度プロジェクト科目

「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」

＜プロジェクト概要＞

身近な学生生活の中から素材を発見し、KBS京都や、朝日新聞等、様々な企業の協力を得ながら、大学生活とは何かを、等身大の学生から広く発信し続けるほか、伝統芸能公演、教育関連シンポジウムの運営にも携わる。

北村龍弥 同志社大学 法学部 政治学科 4 年生

2010 年度プロジェクト科目「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」学生リーダー

14:10 **報告2** 2010 年度プロジェクト科目

「映像の力・若者たちの見た京都」

＜プロジェクト概要＞

「若者の視線からみた京都」をテーマにドキュメンタリー映像を作成。映画・テレビ制作の現役・元プロの講師陣のもとで、企画・構成・撮影・編集・音楽・仕上げまで、一貫して行った。

中谷しのぶ 同志社大学 文学部 英文学科 4 年生

2009 年度プロジェクト科目
「『クラシック・コンサート文化を創る』プロジェクト」学生リーダー
2010 年度プロジェクト科目「映像の力・若者たちの見た京都」学生リーダー

14:30 質疑応答

14:45　休憩（15分）

15:00

■第3部　シンポジウム

「PBL 教育を考える～提言者・在学生・卒業生の視点から～」

山田 和人　**同志社大学 文学部 教授・PBL 推進支援センター センター長**
文学部国文学科教授。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会事務局代表、コンソーシアム京都高等教育研究センター高等教育実態研究プロジェクトリーダー、同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009 年より同志社大学 PBL 推進支援センター長。

海老原嗣生 株式会社 ニッチモ代表取締役

松本 美奈　**読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者**

北村 龍弥　**同志社大学 法学部 政治学科 4 年生**

中谷しのぶ　**同志社大学 文学部 英文学科 4 年生**

三宅 将史　**鳥取環境大学 事務局 キャリア支援課**
2007 年度プロジェクト科目「量から質への『京都型ニューツーリズム』の開発と流通」、2008 年度プロジェクト科目「私の『着てみたい・きもの』をプロデュースしてみよう」受講生。2009 年文学部卒業後、鳥取環境大学職員として主に学生支援業務に携わる。

安本 梓　**京都市立松尾中学校 英語科教諭**
2007 年度プロジェクト科目「子どものための『京都職場図鑑』作成プロジェクト」 受講生。2008 年文学部卒業後、京都教育大学大学院にて、英語教育における対話哲学を学ぶ。2010 年から京都市立中学校にて教鞭をとる。

16:30　終了

＜司会＞
木村 珠莉　**同志社大学 文学部 国文学科 4 年生**
2009 年度プロジェクト科目「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」受講生。ラジオ番組パーソナリティ担当。

17:00～18:30

■懇親会

会場 ： 同志社大学 アーモスト館 ゲストハウス ダイニングホール　※事前申込制

ＰＢＬ教育における多面的評価―ＰＢＬは社会で役に立つか―

2011 年 2 月 26 日（土）13:00～16:30
同志社大学今出川キャンパス明徳館 1 番教室

司会　ただいまより文部科学省大学教育学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育・課題探究能力を育成するPBL教育の方法論的整備」の取組として、シンポジウム「PBL教育における多面的評価―PBLは社会で役に立つか―」を開催いたします。開催に先立ちまして同志社大学副学長・法学部教授　土田道夫先生よりご挨拶をお願いします。

■挨拶　　同志社大学 副学長・法学部教授　土田 道夫

副学長の土田でございます。本日はお忙しい中、多くの皆様にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。第1部でご提言いただきます皆様、シンポジウムにご登壇いただきます皆様には、お忙しい中、ご登場いただきまして厚くお礼申し上げます。

このシンポジウムは文部科学省の大学教育学生支援推進事業の推進プロジェクトの取組の一貫として行うものでございます。昨年6月に一度開催しましたが、本年度2回目として開催するものでございます。

この取組の中心でありますプロジェクト科目について簡単にご紹介いたします。2006年度に本学の全学共通教養教育科目として開設したもので、二つの大きな特色があります。一つはPBL、プロジェクト・ベースド・ラーニングという教育方法を導入いたしました。これは全学共通教養教育科目ということで、学生は学部、学年がさまざまですが、そういう学生が混在して構成される方法をとっております。もう1点の特色は、科目のテーマを広く社会から公募しているということです。大学内部だけの教育ではなく、社会の教育力を大学に導入するというコンセプトでありまして、具体的にはプロジェクトのテーマを社会、地域から公募し、そして選定されたプロジェクトにはご提案いただいた方々に嘱託講師としてご担当いただくという方法をとっております。

このプロジェクトが2006年に文部科学省の「現代GP」に採択されました。大学の中でも、この方法が次第に評価されるようになり、学部の専門科目にも導入が進んでおります。社会的には高い評価を受けているところもあるかと思います。

現在、取り組んでおりますGPは、PBLを実行しつつ、またこれのプロジェクト科目の活動を通して身につく力をプロジェクト・リテラシーという概念でとらえています。具体的にいえば、学生個人の能力を向上させる。身につけた知識、スキルを運用していく。さらにはモラル、リーダーシップを身につけて社会で活躍していける人間に育ってもらいたい。一種のキャリア教育ということになるかもしれません。これを中心として進めているところでございます。本年度は2回シンポジウムをしておりますが、1回目が「PBL教育における多面的評価―社会が求める人材像―」、本日は「PBLは社会で役に立つか」という過激なタイトルをつけまして、社会が大学に何を求めているか。期待する人間像教育、人材育成という点からみて、この取組はどうなのかということを意見交換していきたいと考えております。

本日、キャリア形成、大学教育の現状に深い見識をお持ちの海老原嗣生様、また松本美奈様をお迎えし、大学に何を期待するのか、あるいはしないのか、大学教育で何ができるか、できないのかということを含めて第1部でお話をいただきたいと思います。

そのご意見を踏まえながら本学の本年度のプロジェクト科目を受講する現役の大学生、あるいは在学中にプロジェクト科目を受講して社会に巣立った卒業生の目から見て、このプロジェクト科目が、どういう意味を持っているかを議論していきたいと考えております。議論の過程でフロアの皆様からもぜひご意見、ご見識をご披露いただいて、ご一緒に議論ができればと考えております。ぜひ積極的なご参加をお願い申し上げたいと思います。

以上、簡単でございますが、挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

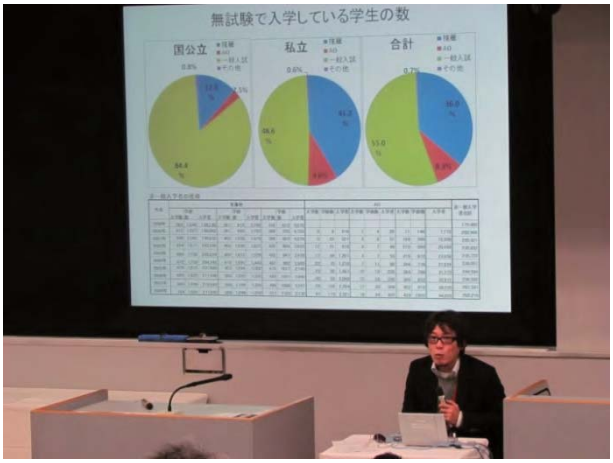
■第１部　提言　「大学教育に求めるもの」

司会　第1部は「大学教育に求めるもの」をテーマに、ご提言をいただき、第2部では2010年度プロジェクト科目履修生による報告と質疑応答、第3部、「PBL教育を考える」をタイトルに提言者・在学生・卒業生を交えて議論を深めてまりいます。私、本日の司会を務めさせていただきます同志社大学文学部4年、木村珠莉と申します。よろしくお願いいたします。

それでは第1部、キャリア形成や大学教育の諸問題に対して、ジャーナリストの視点から常に社会に向けて鋭い問い掛けを続けられるお二人からご提言をいただきます。お一人目は株式会社ニッチモ代表取締役の海老原嗣生様です。海老原様は1964年生まれ、大手メーカーを経て、現・株式会社リクルートエージェントに入社。事業企画や新規事業に携わる他、経営、人事、キャリアをテーマとするリクルートワークス研究所の機関誌「Works」の編集長を務められ、2008年よりHRコンサルティング会社ニッチモを起業、代表取締役を務められています。同社発行の人事経営誌「HRミックス」編集長、ご専門は人材マネジメント、経営マネジメントです。では海老原様、よろしくお願いいたします。

◇提言「混迷する大学教育へのひとつの解＝PBL」

株式会社ニッチモ 代表取締役　　海老原 嗣生



少しお話させていただきますが、就活問題が大変なことになっていますね。どうしてこんなに大変になったのか。景気が悪いから企業の就職口がないのか。これが皆さん、いつも問われるところです。だけど私はデータ的に全く違うことを申し上げたいと思っています。

バブルの頃というのは、企業は景気がよくて、誰でも企業に入れたイメージがあります。あの頃、就職できた人は294，000人、1年あたり。今はこの不況で、景気が最悪で、だめだ、だめだといっていても就職できそうな人の予想数は329，000人、10％以上、今の方が多いです。今、就職できるといっても、わけのわからない知らない企業にたくさん就職しているのではないか、これも違います。日経リサーチが出している日本の主要1，000社に就職できている人の数、バブル時代がピークで5万人くらいでした。今、7万人弱です。1．5倍くらいです。

どういうことでしょう。全く今の方が就職できている人数が多い、いい企業に入れている人が多い。問題は何なのか。この間に大学生が60％も増えているのですね。80年代と比べて大学適齢人口はどれくらい減ったか。18～22 歳の人口は大体30％減っています。でも大学の数は7割増え、大

学生の数も6割増えています。つまり、人口は減っているのに学生数が1．6倍にもなっている。これが結構、いろんな問題を生んでいるんじゃないでしょうか。

なぜこんなことになってしまったのか。大学無試験化という話が出て来ます。これに紐づく大学混迷の話を前半でして、次に、この混迷をどうやったら立ち直れるのか、それにPBLが効くのではないかというお話をしたいと思います。

この資料を見ていただきます。これは出生数です。この60年間の1年間に生まれた人の数。ピークが71年～74年。これは第二次ベビーブーマー世代といわれる人たちです。この人たちが、92～94年に大学学齢期、18～22歳になる。ここが大学学齢人口のピークになります。ここから学齢人口はどんどん下がりだして、今、ピークより4割も減っています。ここのピークを境に、大学生の数も大学の数も減れば釣り合うし、減らないまでも、停滞しているなら、まだわかるのですが、ここから大学の数も大学生の数もまだまだどんどん増え続ける。こういうアンバランスな状況が一つ目にあります。

二つ目。これだけ大学が増えるとどうなるか。どうにかして大学に人を集めないといけないということでいろいろな無理が始まります。ここから何が起きたか。97年に中央審議会がAOを許しましたね。これで今まで大学に行くのが難しいなと思っていた人たちがドドッと入れるようになった。AOに続いてB日程も奨励されました。慶応が、早稲田と、ほぼ同じような試験をつくる。東大や旧帝大にはB日程という形でAOみたいな試験スタイルが出始めます。昔は大学はそれぞれごとの試験スタイルで入ってくるから、大学ごとに、試験科目による学風というものが作られましたけど、今は金太郎飴になっています。私立なら大体、3科目入試でどこでも入れる。2科目入試で入れるところも多い。こういう形でAB二つのスタイルのどちらかに、3 科目か 2 科目で入れるため、入口での学風は壊れました。その代わり、入り口は非常に広くなります。早稲田を受けた人が試験スタイルの違う慶応を、昔はなかなか受けられなかったけど、今は両方すんなり受けられるようになっている。
この、AOやB日程で、ずいぶん入り口が広くなった。

さらに2001年になると、学部設置基準がゆるやかになりました。同じ定員の中なら学部はいくらでもつくりかえていいよ、こんなイメージですね。その結果、どういうことが起きたか。どんどん学齢人口が減ってくる中で、大学を維持するのは資格を得れば何とかウリになるというので、資格をとれる学部が非常に増える。ロースクールとか臨床心理士がとれる学部とか。教師免許のとれる教育学部とか、看護・介護・医療系とか、こういうところがポンポンつくられるようになってくる。慶応には医学部に加えて看護学部も生まれていますね。そうするとどうなるか。本来、そういう資格は専門学校や短大が得意としていたのです。そこに四年制大学が参入すれば、短大や専門学校の経営が苦しくなる。いたちごっこで、短大に泣きつかれて大学への格上げがここで起こる。2002 年以降、大学は飽和しているもかかわらず、ここから85校も増えています。こんな形で大学がボロボロと増えてきた。

そして国立大学を一回受ければ、多くの私立も受けられるような形でセンター試験利用もさらに盛んに推進されるようになってきます。1個受けるとどこでも行けるよ、と、ますますこれで門戸は広くなってくる。こんな形で大学は何とか進学率をアップして、今まで大学に行かなかった人たちをかき集めて大学経営をしている。これが「就活氷河」の大きな問題なんじゃないかと思っています。

結果、学生の学力レベルの低下が必然として起きてきます。こちらは、大学の入学者に占める推薦の割合。これはAOで入ってくる人の数。国立大学は一般入試が今でも多いですが、それでもその割合は、もう85％まで減っています。私立だとどうか。一般入試は半分を切っています。48．6％。推薦入試が4割、AOが1割。国立私立合計すると、定員は私立が圧倒的に定員が多いので私立

のAO・推薦比率に引っ張られ、40％以上の人たちが試験を受けずに入ってきている。
ただ推薦は成績基準があるから、それなりに高校の時、勉強した人ではないと入れないのではないかと思われるでしょうが、その希望的観測も次の図で打ち砕かれると思うのです。みてください。

推薦のうち36．8％、3分の1以上が高校の成績基準なし、通信簿関係なく入ってきている。次に、成績基準2．7以下、という大学が2．9％、これ、問題外ですね。さらに3．4以下、これも難しい基準ではありませんが、こうした基準を設ける大学が32％。合計7割の人たちがあまり勉強せずに入っています。AOだともう壊滅的で、成績基準なし、が9割です。
それでも、AO入試でも一芸のように、何がしか秀でた活動を成績基準とするのが多いというような、別の意味の「優秀さ」が必要なのか思うと、そうした活動基準さえまったく不要、というのが66％、つまり3分の2。何かしらの秀でた活動が必要だというAOは全体の33．9％。これだけしかないのです。
この33．9％の「高校時代の秀でた活動」の基準の中身を見てみましょう。
たとえば、早稲田大学の教育学部です。何がOKか。ここの基準だと高校時代に都道府県大会以上で優秀な成績をおさめるということが一つの基準になっているそうです。でもみると、カルタとか、サンバカーニバルとか、本当にこれでいいのと思うようなものが、たくさん入っています。さらに大学側の恣意性で基準はどうにでも曲げられるのですね。この早稲田の教育学部に 1998 年に、一芸入試を使って広末涼子さんが入っていますよね。広末さんがどこかの高校の都道府県大会で優勝したのかわかりません。一説によると文化庁の映画新人賞で入ったといわれています。それはどこの高校でやっているのか、どこの都道府県でやっているのか、こういう恣意的な選抜の仕組みになっている、そんな問題もあるのです。
　要は、単なる無試験化、学力低下に拍車をかけただけの状態。ちなみに、図を見ていただければわかるように、海外の無試験入学はもっと難しいという現状が一つある。それからこれは大新聞に掲載された記事ですが、九州大学、一橋大学が「AO入試の人たちの学力が著しく低くて困っている」。そのため09 年にドドッと国立系でB日程やAO型が廃止になっています。

文部科学省もようやく危機感を抱きだしました。09 年3月11日、文部科学省が11年度入学選抜に関する通達でAOに対して初めて規制を入れている。学力審査を入れなさい、活動基準、高校の時に何かやっていたか、これも盛り込みなさい。入学前に補習しなさいと入っています。さらに文部科学省もいらだっているのがよく見えます。この通達は、2011年度からの入試の話なのに最後の付則で2010年度からなるべくやりましょうという言葉が一文入っているのですね。無試験入学は低学力大学生の乱造に終わったのではないかと。私はそう見ているのです。厳しい言葉で、こういうことをいわないと、オブラートに包むとなかなか伝

わらないのでね、あえて厳しい言葉を使っています。

後半の話は、産業界から手前勝手なお願いなのですが、大学のこういう混迷に対してどうしていくかという話です。産業界のためだけに大学はあるわけじゃないから、あくまで勝手な話だと思ってください。勝手ながら一つの案として、これも使えるんじゃないかという話です。

まず、前提として大学の専攻は職業とはつながらないとうこと。この前提を頭によく置いておいてほしいのです。わけのわからないジャーナリストで、時々、欧米の大学は学部とキャリアがつながっているというのですよ。アメリカの人事コンサルタントに聞くと、そんなアホな話あるかといつも笑われます。アメリカ人だって大学出て一番多くになるのは営業だよ。営業はどの学部で勉強するの？次に多いのは人事とか総務とか。これもどの学部と関係があるのか。アメリカは大学生の数が結構多いので、卒業して製造や販売に入る学生も思いのほか多いそうです。この仕事も、どの学部と関係があるのか。文系を出たら、世界中どこだって、学校の勉強とは関係ない仕事についているのですよ。

日本でも、最終的には多くの人が営業につくことになる。営業に、近しい専攻はないですね。じゃ、経理はどうか？確かに経営学部、商学が少しは近いが、でも、専門学校の経理コースの方がよほどドンピシャですね。総務は全く関係する学部学科なし。人事は、たとえば組織心理とか年金法とか給与計算とかちょっとずつ細々とつながる専攻があるけど、それは方々に散らばっていて、ドンピシャな学部などない。販売もない、製造もない。システムだって、普通のプログラマー、SEなら情報工学を出る必要はありません。そう、多くの人が就く仕事につながる専攻はほとんどないですよ。
では、少数の人が就くｽﾍﾟｼｬﾘｽﾄ、たとえば法務はどうか。これはロースクールで直結しています。マーケティングはどうか。これもMBAで直結しています。税務、会計ならCPA。これも直結している。金融は金融工学、こちらも直結している。ただ、こんな職種をたくさん採用している会社なんて、ほとんどない。直結しているところに行ける人なんて、ほんの一部なのです。アメリカだってこんなｽﾍﾟｼｬﾘｽﾄで通用するのは超上位校ばかり。どこの世界だって、専攻がキャリアと通じている学生なんて、ほとんどいないのですよ。これが現実だということ。どの国でも大学の専攻と関係ない仕事につくという厳然たる事実がある。つまり、専門教育を強化しても産学との架け橋にはならない。こういう現実です。

産業にとって意義の高い大学とはどういうものか。ちょっと考えてみたいのです。多くの人がつくことになる、営業・経理・人事・総務・販売・製造・・・こういう仕事、ここには一貫性した共通性はない。つまり、共通の架け橋となるのは、共通の専門教育ではありえない。
じゃ、何があるのか、というと、先ほど話しましたとおり、AOや推薦といった形で無試験で入ってくる人が非常に多い。とすると、基礎教育の再教育はぜひやっていただい。超上位校の人たちでも、ＡＯ入試のため、宮崎県と宮城県の場所がわからない人たちがいる。これは大手企業の人事の人が、よく嘆く話です。小学校算数や日本地理、歴史など教養学部で復讐する。そう、大学で補習の府となってほしいというのが一つあります。

2つ目に実学。これは各学部にばらばらに散らばっているのですが、社会でそれなりに使える実践系の学問を集めて一般教養で教えていただけないか。価格理論、マーケティング、スワット分析、3C分析、組織心理、労働法、商法、会社法、特許法、税務、給与、社保、こんな法学部、経済学部、商学部、文学部に分かれているものを一つに集めて教えてもらえたら。こんなカリキュラムで就職実践コースをつくったら多分、一番人気になるはずだと思っています。

3つ目がリベラルアーツです。こちらは学力の構造展開と考えています。高校までの教育と決別し

てほしい。高校までの教育は社会でなかなか通用しない。社会でやっていく上で必要となる頭の構造づくりです。
それはどういうものか。
高校の授業、たとえば図のように地理と世界史と化学のカリキュラムがあると思います。世界史は中世、近世とやってきて、今回の試験は近代が出るとしましょう。今回は現代は出ません。出るのは近代のみです。まず、こんな感じで範囲が決まっている。試験範囲の前と後ろは関係ない。近代のテストを解く時に近世の話は関係ない。現代も関係ない。あるのは今、この単元だけというのが高校の試験。同じ学期に、地理では気候を、化学では高分子をやっていたとします。でも、歴史の試験を解くのには、気候も高分子の知識も関係ない。試験で問われるのは科目で切られ、さらに、学期で区分けされた、賽の目切りの「近代」というところだけ、こういう感じですね。前後も左右も無関係。こういうのが高校の頭だと思っています。他の科目は関係ない。前後の事態も関係ない。そして、多くが答えを暗記する。決められた範囲で目の前にある解だけを暗記によって解くというのが高校の勉強だと思っているのです。
これに対して大学はどうか。ある面、カーボンコピーになっている。法律と経済と経営、勉強していて、今は、経済の中のミクロをやっているのでマクロは関係ありません、という感じ。もちろん同時期に法律で民法を教えていますが、民法の知識は関係ない。経営で簿記を教えているけど、それも関係ありません。目の前の賽の目斬りされた課題だけを解く。頭の構造が高校と変わらないわけですよ。
これで社会に出て通用するか。通用しないわけです。社会に出て、目の前で賽の目切りされて、これだけやればいいという課題はないです。それも、昔のような工業や建設業が中心なら、ある面、賽の目切りされた目の前の課題だけでも、かなり通用したはずです。
ところが今は、つかみどころのない対人折衝業務が仕事のメイン。「この部分だけ」なんて話、ないですから、四方八方から矢が飛んでくるのが実社会なのです。大学生の頭も、基本は高校と同じ構造だから、社会人になったら構造転換しないといけないだろう。図に示した、こんな形です。
社会人になったら弁慶の七つ道具じゃないけど、こんな形の課題が自分の回りを取り巻いている。これに対して自分のすべての力をあわせて立ち向かわないといけないのです。
すべての力で解く勉強方法を子供のころからやっているか。
私にも娘がいて、勉強をしているのですけど、小学校の理科をみると悲しくなる。札幌で日没の時、那覇では太陽の高さがどれくらいの位置ですか。こういう問題です。同時期に、日本地理で、札幌も那覇もその場所をならっているんだから、その知識を利用して、札幌の経度は何度、那覇なら何度、と計算すればいいのに、そんな「社会理科融合」の試験は出ません。これは、あくまで理科の知識だから社会の知識は関係ないものとして、ご丁寧に、試験問題に札幌の東経は何度ですか、那覇の東経は何度ですか、とわざわざ書いてある。日常生活では「今日、札幌に行ってくるけど、札幌って何度くらいかな。東京がこれくらいだから、寒さはこれくらいだよね」。それは自分の過去の知識の中でときます。出張指示書の中に、東京の緯度はこれです、北海道の緯度はこれだけですなんて書いてありません。自分の頭の中で覚えている知識を利用するのです。そう、頭の構造を転換しないとだめでしょう。
そのための力が、これがリベラルアーツだと思っているのです。
リベラルアーツというのはどういうことか。シームレスな課題に対してシームレスな力で臨むのがその真骨頂だと思っています。リベラルアーツが頭の構造転換になるはずですけれど、ただ、これを教えるのが難しい。実用的なメソッドもなかった。大学教授の方は、よくいわれます。大学のカリキュラムは85％以上の教授が教えられるものにしないといけない。リベラルアーツなんていうと、教えら

れるのは10％か5％になってしまう。見よう見まねで、ディスカッションだの、ディベートだとやっているけど、ほうほうの体で退散していった。これが現実なんじゃないでしょうか。

リベラルアーツの教育に対しては、指標が見出だしにくい。また、教師にスキルが必要だと。この難題を解決するのに、ようやく出てきた真打がPBLなんじゃないかな、と思っています。PBLを見ていて、ああ、そうか、こういう方法があったんだと。これに携わるようになって、ようやくわかりました。これはリベラルアーツ力なんだなと思っています。シームレスな課題にシームレスな力づくりをして対処する。これの根本原理として、PBLに期待しています。大学再生、社会で使える力、人間が生きていく上で使える力づくり、その場が、PBLになるだろうと思います。

ご静聴ありがとうございました。

司会　続きましてお二人目のご提言に移ります。大学教育の質が問われはじめた昨今、100校を越える大学の実情を紹介する現場リポートとして、2008年より読売新聞全国紙紙面で掲載されている「大学の実力」をお読みになられた方も多いかと思います。本日はお二人目の提言者として読売新聞東京本社編集局教育取材班記者、教育ルネッサンス「大学の実力～教育力向上の取組」ご担当、松本美奈様をお迎えします。松本様、よろしくお願いいたします。

◇提言「なりたい自分」だけでいいのか　「大学の実力」調査から

読売新聞　東京本社　編集局　教育取材班　　松本 美奈

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました読売新聞の松本美奈と申します。今日は同志社大学の山田先生に「今日の主役は学生だから」といわれました。私も、すばらしいお話をしてくださった海老原さんも前座です。海老原さんが、マシンガンのような、本音トークを大胆に展開してくださいました。頭の中の整理をするために休憩時間が必要かと思います。私のこれからの話はお休みと頭の整理のための時間に使ってください。読売新聞「大学の実力」調査をやっていく立場から大学教育に何を求めるかということを自分の考えも含めてお話したいと思います。

私は高校生から1歳まで、3 人の子どもがおりまして、自分の子どものこともロクにみられないのに、何が教育だというのは、いつも私の口癖でして、自分の頭のハエも追えないようなのが、教育を語りたくないので、いつも私は社会保険労務士で……と言い訳のようにいっています。私は教育が専門じゃありませんよ、ということを言い続けています。今日はこんな内容でお話します。「大学の実力」の調査とは何か。それをこってりしゃべりたいんです。でも今日は違います。今日は同志社の皆さんのために割愛して、二つ目は、この調査の中の一項目である「退学率は何を語るか」。そしてそこから読み取れる「必要とされる自分の力」ということで、この3つについてお話を申し上げたいと思います。

一言でいいます。大学の実力は、研究力、財務の健全性とかあると思いますが、大学の実力調査で、実力といっているのは学生の可能性を引き出せる力、これが大学の実力だと考えています。ではそもそも、大学の実力調査とはどんな調査なのか。狙いは一つです。「偏差値やブランドによらない正しい大学選びのための情報提供」。「大学の実力」調査は2008年に始まりまして、昨年夏、3回目の調査の結果を発表しました。毎年5月、学校基本調査が大学に届いた時、そのタイミングを狙って郵送しています。発表するのは毎年7月です。これは何を狙ったというと、高校の進路指導の現場で三者面談、大学ではオープンキャンパスが全国的に始まる直前に新聞で発表します。お手元に大学の実力調査のコピーがいっていると思います。これも持ってオープンキャンパスにいってほしい。それを狙って、毎年やっています。うれしいことに、あちこちの大学から「来ましたよ」という、ご連絡をいただいています。

最初、どうなることかと思いました。大変いやなことを聞いています。個々の大学の退学率、卒業率は今まで出てきたことのないデータでした。当初は反発を受けて、1大学も返事がないんじゃないかと思ったら、意外なことに当初から499大学、回答率7割弱からご回答をいただき、昨年の調査では592大学、8割を超える大学からご回答をいただきました。すごく不思議ですが、文部科学省の副大臣の鈴木寛文さんから「読売新聞は他のすべての事業をやめてもいいから、これをやってくれ」といううれしい言葉をいただきました。学校教育法の施行規則情報公表が今年4月から始まります。その時に参考にしてくれました。「大学の実力」調査で聞いている退学率、卒業率というのは全部外されましたが、残念な話です。

毎年、「大学の実力」ではテーマを設けています。大学設置基準の改正で教育力の組織的向上が義務づけられた年には「FD」を。その翌年には、それがどう学生に届いているかを中心に「学生支援」にしました。昨年の調査は「就職に強い大学とは」というテーマです。といっても就職率の高い、低いを、ランキングすることが目的ではありません。一体、大学は社会に通用する人間をつくるために、どんな教育をしているのかという内容で50項目を聞いています。

先程、なぜ偏差値やブランドに拠らないと申し上げたか。今日のキーワードになるのですが、偏差値は皆さんの方がよくご存じです。一般入試の瞬間風速です。当然のごとく予備校によって集計報告が違います。ハガキか、電話か。電話の場合、いつのタイミングで、どこに電話をかけたかによって全く違ってくる。もう一つ、自分のところの模試が基準になっているわけですから、その難易度によって全く違う偏差値が出てきてしまいます。同じ大学の同じ学部であっても、某Yゼミ、S台、K塾によって違います。

大学も操作可能です。極端な話をすれば一般入試の合格者をたった一人にしたら偏差値は70くらいになると思います。当然のごとく偏差値が高いから、いい大学、これは皆さんの方が、よくご存じです。そうであったら、こんなに楽な数値はないはずです。それが通らないから、今、大学の教育力が揺らいでいる。これが一番問題だと思っています。この偏差値が大学だけではなく、小学校、中学校でも負け犬意識として子どもの中に刷りこまれている。ある、お受験率の盛んな地域の小学校を4月に、覗いたことがあります。そこで見た時、びっくりいたしました。ランドセルが飛ぶんです。教室を。公立の小学校1年生、ピカピカのランドセル、自慢になると思ったら、違うんです。そこはお受験率が盛んだから公立の小学校に来る子は不合格だった子です。行きたい小学校に行けなかった子どもなんです。その子がランドセルを投げるんです。あのランドセルを小さい体が投げるんです。こんなスーパーで買ったランドセルなんか背負いたくないからです。校章入りの立派なランドセルを背負いたかった。だから投げるんです。その担任の先生がおっしゃいました。「これは恒例行事です。毎年、4月にみられる風景です」と聞いた時に、私は偏差値の罪深さを感じました。

別に偏差値が悪い、すぐになくせ、というつもりはありません。偏差値も使い方次第なので、物差

しの一つです。自分の健康チェックに体重を使います。でも体重だけ使ったら間違った健康法になります。体重だけ10キロ、20キロ減らせばいい。だったら食事を抜けばいい。どうなるか。死んじゃうだけです。偏差値も同じです。いくつかあるデータのうちの一つとして使えばいいのに、そうじゃない使い方をされている。だからこういう病気として出てくると考えています。

その結果、何が起きるか。偏差値やブランドが、そうそう通用しないということは、皆さん、薄々感じている。でもなぜ頼りにするのか。決まっています。受験生側は、どうせ、大学はほんとのことを言わないんじゃないか、いいことしか言わないじゃないか。実際、そうだと思います。オープンキャンパスも実は眉唾ものだなと思っているんです。ある坂の上にある大学で、ここの大学、オープンキャンパスの時だけ、バスが坂の上までいきます。息切れするような坂です。オープンキャンパスで受験生がバスを下りると、教職員の皆さんが「こんにちは」と出迎える。これはありえない姿ですよ。ありえない姿だけど、錯覚してしまう。「違いますよ。フェスティバルですよ、お祭りですよ」といってくれればいいのに、「ああ、フレンドリーな大学だ、ここ、ステキだな」と受験生が錯覚を起こす。実際入ってみたら坂の下でバスは止まり、誰も迎えに来てくれない。違うじゃない。違うんですよ。そんなの信じる方が甘いんだといえば甘いんです。でも単純に信じてしまう。なぜでしょう。

オープンキャンパスをする大学で聞きました。「これ、ウソじゃないですか？」。学食にいったらタダで食べさせてくれるんですよ。「いつもされるんですか？」「やりませんよ」「なんでやるの、お宅、いい教育をやっているじゃないですか、それで宣伝すれはいいじゃないですか」「どうせ受験生は偏差値とブランド頼り、これで来るんだもん、宣伝したってしょうがないじゃないですか」。そうです。でも変えるのは自分たちじゃないですか。でも。誰も聞いてくれないんです、たわごとだと。挙げ句に入れた学生に対して嫌悪感を示す。うちの学生はバカだから、うちの大学は偏差値低い大学だから。決して世間的に見て偏差値が低いとか、うちの大学はバカだからという話じゃないですが、その先生の中の偏差値で、先生の中での学生のレベルなんです。そういう先生たちは、授業でやるんです。「どうせ君たちにはわかんないだろう」って、必ず言います。不思議なことに必ず言うんです。いわなくてもオーラで出しちゃう。どうせわかんないだろうみたいな上から目線で授業をやっちゃうんですね。学生はあたりまえです、わかります。自分がバカにされているのは敏感に察知します。だから「どうせ、こんな大学」という、ミスマッチがおきます。ミスマッチの一つの大きな現象として出てきているのが退学ではないかと思っています。

ただちょっとここで補足しておきます、退学率高い＝悪い大学ではありません。退学率の低い大学＝いい大学ではないということです。退学率という問題は最初からこの調査で尋ねています。退学率を調査して実感しました。読みにくいんです。退学率が高い＝悪いだけではない。高いのが教育力の裏返しだったという大学も、いくつかあります。ある大学で一生懸命教育をやっている先生たちがいた。やっているうちに学生に火がつくんです。もっと勉強したい、あれがやりたい、これがやりたい、ところがその大学ではやりたいものがなかった。「わかった、一緒に君が学びたいところを探そう」。学生と先生が一緒になって考えて大学のホームページをみた挙げ句、「ここで行こう。この大学を受験しなさい」。めでたく合格しました。でも、最初の大学にとっては退学率になるんです。そんなこともあるので、必ずしも退学率が高い＝悪い、ではないよということを、繰り返し毎週木曜日、「大学の実力」というコラムで書き続けています。

もう一つ、本当に問題だと思うのは、不本意入学です。旧帝大系でもこういう人たちがいます。こういう人たちは、仮面浪人をします。いつも自己嫌悪、「自分はだめだった、バカだった。どうしてあの大学に入れなかったんだろう」。親に申し訳ない。不思議なことに、退学し、ひきこもりになった学生さんは、ずっと親に対して申し訳ないという気持ちを持っています。退学した人たちをずいぶんおっかけてインタビューしました。その結果、気がついたのですが、罪悪感は消えない傷痕になってい

ます。最近会った29歳の男性、もう退学して10年近くたちました。「なぜあの大学に入ったのだろう、なぜ退学したのだろう、なぜこんなに親に迷惑をかける自分でしかないのだろう」。まだ引きずっている。一生引きずっているかもしれない。なぜか。小さな躓きが致命傷になって退学してしまうんです。友だちができない、授業が難しい。どうも学食に座る場所がない、こんなことから学生が心のシャッターを下ろしてしまう。いつまでも傷が残る。

こういう根底にあるのは何か。負け犬意識、これがあるのではないかというのが、私の推論です。いろいろお会いして伺っているうちに、負け犬意識が強いのではないかと思っています。さらにその中に何があるのかと覗き込むと「なりたい自分」と「なれなかった自分」です。第一志望のこの大学でバリバリやってる自分、でも入れなかった自分、一目瞭然です。誰に何もいわれなくても、親御さんは「いいんだよ、ここで新しい人生が展開できるじゃないか。」といったとしても、負け犬意識は払拭できません。なぜか。自分がよくわかっている。そしてこの「なれなかった自分」という現実に対応できない。そんなふうに思います。

負け犬意識は、払拭できないのか。そうではないと思っています。今年4月から大学では就業力教育が義務づけられました。そこでまたこれが一杯出てくると思います。「大学の実力」調査で、エントリーシート対策に力を入れている大学が少なくないことがわかりました。この中で、学生たちに、「なりたい自分」と何度も何度も書かせる。また、「なりたい自分」ですよ。「なりたい自分」、「なれなかった自分」、二者択一なのに、こんな危険なことをなぜやるのだろうと思ったんです。やる気を起こさせるためには、いい方法だと思います。これを否定するつもりはありません。でもヒートアップするんだったら、もう一つ「必要とされる自分」。必要とされる自分の中の「なりたい自分」であってほしい。一部が重なる形でもいい。「あなたは社会に必要とされているんだよ」ということを、どうぞ伝えてもらいたいと思うのです。

中学校1年の時から20年間、ひきこもりだったという男性に会いました。その男性が20年間のひきこもり生活から出てこられた理由は一つです。この男性はある引きこもり支援のNPOで日雇い労働者の町の清掃、炊き出しのボランティアをすることになりました。毎日、「おい、あんちゃん、また来てくれたのか」と声をかけられる。「○○君、待ってたよ、手が足りなくて困ったんだ」とNPOの人たちに声をかけられる。その方は朝起きることができなかった人なのです。今までは昼過ぎまでずるずると寝ていた。ところが遅れると「いやあ、あんたのこと待ってたんだよ」「○○さん、心配してたよ」といわれる。そこでその人は「必要とされる自分」を実感するんです。あ、自分は必要だったんだ。俺がいなくも何とでも世間はなると思っていたら、俺はちゃんと頼りにされてたんだ。頼りにされる充実感を、そこで初めて味わいます。その時、彼は誰にもいわれなくても、出てこられるようになるんです。なりたい自分があっ

た、なりたい自分は必ずしも、こういう姿ではなかった。でも彼は今、必要とされている自分を実感するんです。今、彼は、心に問題を抱えた子どもたちの相談相手として腕を奮っています。子どもたちに言うのは「お前なあ、どんなことやったって20年間ひきこもりの俺には叶わないんだ」と笑って言う。そうするとたいがいの子どもは黙っちゃう。「そうか、20年間ひきこもりか、俺にはできない」「そうだろう」みたいな感じです。だから彼は「必要とされる自分」を実感できる。

でもそれは大学に、できないか。できるんです。必要とされる、自分を実感させる取り組みを、もうすでに、やり始めた大学はあります。ある大学、この大学は大変退学率が高い大学です。大学は「必要とされる自分」に着目しました。その大学ではオープンキャンパスに、金髪のあんちゃん――言い方は悪いですがまさにこんな感じの学生たちを集めた。その大学の理事たちは、うちの学生は退学したらフリーター、ニート、ひきこもりになると危機感を持っていた。だから始めたんです。「オープンキャンパスを君たちに任せるよ、やってくれよ」と理事がいいます。「エエッ、だって俺、こんな大学に来たくなかった」「いいじゃないか、今、いるんだから、頼むよ」「エーッ、そうお？」。そこにお節介焼きの職員の人たちが出てきて、「〇〇君、頼むわ。私たちも手が足りなくてさあ。大丈夫、お弁当、毎日私がつくってきてあげるからさあ」。そんなこんなで任されて、何をしようか思案をめぐらせるうちに、この金髪の学生たちは「このままでオープンキャンパスに出ていいのかな」と、ふと考えるんですよ。1カ月後に金髪が茶色になるんです。不思議です。最近、1月に会ってきました。黒いんです、髪の毛。これが成長か、と思いました。誰のために学ぶのか。オープンキャンパスで彼らは学んだんです。「俺、こんな大学に来たくなかったんだけど、なんか嫌なんだけど、でも俺、あてにされているから来るんだよね」と偉そうに言うんです。でもきちんと挨拶できるんです。人に会うときは、きちんとスーツを着ることも覚えました。これは立派な成長だと思います。素敵な話だと思いました。

こういう大学に共通しているのは、ここです。「山登りより川下り」。山のてっぺんを目指せ、ではなく「君には君の人生があるよ。だから、その君の人生に一緒にイカダに乗っていくよ。一緒にやっていこうね。そこには君を求めている社会が待っているよ」ということを一緒に考える人がいます。

これは大学だけでいいのか。これこそ小中高校でやるべきじゃないかという声はいっぱいあると思います。そうですが、実は私自身は小学校、中学校、高校、大学を回っていて一番期待しているのは大学です。学習指導要領に縛られない大学こそ、これができると思っています。土田先生が「社会の教育力を活用するPBL」とおっしゃいました。ならば大学教育のPBLは社会に役立つか、役に立ってもらわないと困るんです。役に立ってくれないと、私たち社会で待っている、次の世代を育てている人間にとって、本当に困るんです。新しい世界を広げてもらいたい。それには何をするのも、何をしないのも自由、大学ほど適した舞台はないと思っています。私は大学と、そしてこれからのPBLに、心から期待しています。これで私の話を終わります。どうもありがとうございました。

■第２部　学生による報告「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」

司会　それでは第2部、大学生による報告、「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」に移らせていただきます。ここからは本学PBL推進支援センター長、プロジェクト科目検討部会部会長でもあります文学部教授・山田和人先生に司会をお願いいたします。

山田　ご紹介頂きました山田でございます。ここからは今、話題になったようなことが実際に学生さんの活動の中で、どれくらい実践されているかを皆さん方にごらんいただきたいと。自信作でございますので。かなりプレッシャーをかけていますけど。トップバッターは北村君。スタートしていただきたいと思います。それではよろしくお願いいたします。

報告１　「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」

同志社大学 法学部 政治学科 ４年生　　北村　龍弥

皆様、こんにちは。2010 年度プロジェクト科目「花のキャンパスライフ」学生リーダーを務めさせて頂きました法学部政治学科4年生の北村です。

今回の趣旨は、二つあります。一つは同志社大学プロジェクト科目で学生がどういう活動をしているのか、その内容をお伝えすること。そしてもう一つは、プロジェクト科目やPBLという形式を通じて学んだことを、学生の視点から報告させて頂きたいと思います。

それでは報告の流れを申します。今回の報告はこの5つの項目に沿って進めます。1つ、実際に私の所属しているプロジェクトがどういうことをしたのか。2つ、プロジェクトから学んだこと。3つ、それを学ぶことができた理由。4つ、PBLの形式、プロジェクト・ベースド・ラーニングという方式から学ぶことができたこと。最後に5つ、プロジェクト科目やPBLに対する私の思いを述べさせて頂きたいと思います。

まずは一つ目、プロジェクトの内容について。私どものプロジェクト名は「花のキャンパスライフ」と申します。一言でどのような団体かと申しますと、メディアクリエイター集団です。ラジオ番組・新聞・映像作品を、インターネットやKBSラジオ様等の公共の電波を通じて、発信させて頂いています。作品のテーマは「大学生活の魅力」を発信することです。

プロジェクトの目的は「情報発信の能力を高める」ということです。ここでいう情報発信とは何か。それはずばり、「自分が、良いと思ったことを相手に、自分の相手、もしくは世の中の方々に伝えて

いく能力」です。普通の社会、企業などでいうところのマーケティング、コピーライト、CMなどの宣伝活動がこれにあたります。

その目的、情報発信能力を高めるために一体どんな手段をとったのか。ラジオ番組、インターネット、映像作品、新聞の制作に取り組む中で、情報発信の能力を高めていきました。

その中で代表的なものが、ラジオ番組「花のキャンパスライフ」です。この番組は、1年間にわたってKBSラジオ様と共同で制作をさせて頂きました。なので、実際に公共の電波に1年間、月1で放送させて頂きました。その番組の中では、話し手であるパーソナリティ、今回、司会をされている木村さんですが、その放送回の責任者であるディレクター、番組全体の構成を考えるプロデューサー、等々ほとんどの役割を学生が担当させて貰いました。この番組の制作を通じて、現役プロデューサーの方から取材許可のとり方や、作品づくりへの心構えを教えて頂きました。

もう一つ企業の方と協力させて頂いたものに「花のキャンパスライフ新聞」があります。こちらは朝日新聞様のご指導のもと、制作させて頂きました。こちらも学生主体となって新聞の取材をしたり、文章構成考えました。記者の方々から新聞独特の言葉づかいや、事実で相手にご理解してもらう文章の書き方などを教えて頂きました。

以上の様にして作品に取り組んでいきました。

では続いて、どんな流れてプロジェクトを進めていったのかについてです。私共はPDCAサイクルに則って活動を進めていきました。まずはプラン、計画。プロジェクト科目には、学生がやりたいことを学生が自ら授業をつくっていくというコンセプトがあります。その特性を活かして、学生自身に企画書を書いてもらい、その企画書をもとに活動を始めて行きました。1年間を振り返ってみると、提案された企画は実に30本を越えていました。もちろん学生が考えることなので、最初に出した企画は現実性の薄さからお蔵入りになってしまったものもあります。

続いて実行。どのようにしてつくっていったかです。ラジオ番組は月平均40分番組を3本収録していき、新聞は月平均2本のペースで発行してまいりました。そうやって1年間作って行ったものが、こちらの作品になります。それぞれの作品にあるテーマは「花キャン新聞～挑戦と愛～」「みつけよう自分らしい大学生活～ラジオ番組・DOする！？同志社～」「聞いてほしい大学生の音楽がある～ラジオ番組・ミュージックチャンネル～」等々、多種多様な方向から大学生の魅力を情報発信していきました。実際どれくらいのものをつくったかと申しますと。ラジオ番組は、5種類、計26回放送。番組累計時間にすると1200分。そして新聞は3種類、発行累計4500部。こうやってみてみるとずいぶん作ったなと思います。

続いて評価。企画に取り組み、作品として完成させた後は、もちろん反省会をする必要があります。ラジオ番組に関しては作品完成後に毎回、反省会を行いました。その反省会は1回あたり連続で3時間に及ぶことも度々ありました。ああだ、こうだ、これは違う、今度はこうじゃないの、と議論が白熱しました。

次に改善。反省会で得られたことは次に活かさなければ意味はありません。代々、責任者、デレレクターに継承される秘蔵のノートというのがあります。一見何の変哲もない普通のノートなのですが、これは様々なノウハウが詰まったノートなのです。このノートはその番組のリーダーを担当した者が、気づいたこと、次の人にぜひとも気をつけてほしいことをどんどん書き留めていった秘蔵のノ

ートです。「花のキャンパスライフ」のメンバーが新しく企画に取り組む時には、まずはこのノートに立ち返ります。今から自分がつくる企画は、どういう狙いがあるのか、何を伝えたいのか。その時に、過去の失敗であったり、これはよかったというものを見るために、このノートに立ち返ります。

以上の様にして計画、実行、改善、評価、そしてまたPDCAサイクルに則った流れでプロジェクトを進めていきました。そして情報発信の能力を付けるように試みました。

報告の流れの二つ目「プロジェクト科目を通じて学んだこと」に入ります。プロジェクト科目から学んだこと。それは「心遣い」と企画力からくる自主性であると私は感じております。

心遣い。心遣いは大切だなということを学んだわけですが、どうやって学んだか。それにはこんなエピソードがありました。「届け遅れた新聞、礼節には礼節で返す」。新聞をつくるに当たって、沢山の社会人の方々にご協力を頂きました。その中には大変お忙しい方もおられました。私も実際に取材に行き、社会人の方の貴重な時間を30分いただき、取材をさせて頂きました。そして記事を書きあげ、先方との約10回にもわたる内容チェックを終えて、無事に自分の新聞記事の担当を終了しました。そこで数えてみると、取材交渉から記事の完成まで2月かかっていたこともあって、個人的には「書き終えた！これで無事に新聞になる」というところで満足して安心してしまいました。すると、あろうことか、自分の怠慢ですが、お世話になった社会人の方に、「新聞が無事完成しました！こちらが出来上がったものです」という、報告と納品が遅れてしまいました。先方の方からは「結局、あの取材してくれた記事はどうなったの？」と直接、こちらから連絡する前にお電話を頂いてしまいました。連絡を頂いた時には、新聞か完成したということを勝手に自分だけで満足してしまっていた自分を非常に情けなく思いました。作品の完成はかかわった相手にも満足していただいてこそ、実現するのだということを学びました。ご迷惑をかけてしまった社会人の方に新聞を持っていった際に、こんな一言を頂きました。「礼節には礼節をもって返すべきだよ」と。プロジェクト科目に限らず、自分が物事に取り組む時には相手の存在が絶対にあるということを忘れてはならない、だからこそ相手への心遣いである「礼節」を尽くさなければならないことを学びました。

心遣いの大切さを学んだ二つ目のエピソードです。「仲間と協力してこそ、よい企画、よい作品となる」。その気づきというのはラジオ番組を作っていた時にありました。私があるラジオ番組のプロデューサー、つまりは責任者を担当していた時のことです。その番組は大学生活について現役大学生の方をゲストにお迎えしてお話を伺うものでした。個人的にはこの番組、真面目で濃密な、「君は大学生活ってどう思う？」と真面目な議論を60分間、連続でや

ればいいんじゃないのかなと思っていました。そして、そのような番組構成をチームに話しました。すると、報告が終わってから、他の番組の担当プロデューサーが、一言「聴いている人が疲れない？」とばっさりと言われました。私も迷ったのですが、最終的にその言葉を真摯に受け止めて、番組の構成を真面目なものと、バラエティを交互に織り交ぜて、息抜きのある番組にしました。最終的にその作品が仕上がって、いろんな方に聴いていただくと「番組のテンポがあって聴きやすかったよ」といって頂きました。もし番組を作る時に仲間の声がなかったら。自分のこだわりだけで番組を作り、聴き手への配慮を欠いた作品に、なっていたでしょう。このことから、チームというのは自分一人ではできない、相手への心遣いをも可能にする貴重なものなのだなと学びました。

続いて、プロジェクトから学んだものは企画力。つまりは自分の思いを形にする力。このことを学んだきっかけというのは企画書を作っている時です。チームプレーをする時には、いかに自分の考えや、自分の頭の中にあるアイディアをチームのメンバーに知ってもらうかです。口で言うことも大事ですが、文章にして読んでもらうことも大事です。企画書をつくって行く際に、最初は単なる文章の羅列だったんですが、だんだんと色違い、カテゴリー分類などを気にしだすようになり、より相手に伝わるように工夫をしていくようになりました。企画を円滑に進めていくには、いろんな形で相手に伝わるように自分で努力をしていかなければならないなと学びました。

企画力について学んだきっかけの2つ目です。「企画責任者の集まりは、アクティブなチーム」。私どものプロジェクトのメンバーは8名おりまして、それぞれが個人の企画に取り組んでいきました。つまりは、一人1企画。このようにした理由ですが、自分がやってみたいなと思うことが少し含まれてないと、人間やる気にならないと思ったためです。自分で企画して、自分の思いを形にすることをやってもらって行きました。最初はモチベーションの維持のためだけに一人1企画の方針を立てていました。しかし、ちょっと違う効果がありました。一人1企画。それをメンバーの半数くらいが自分の企画を終えた頃、チームメンバー同士の議論が活発になってきました。今思えば、ですが、それぞれが作品づくりで得た経験というものが、自信にかわって、客観性や表現のバランスなどの観点から、作品について相手にしっかりと意見を言えるようになったのではないかと思います。聞き入れる方、いわれる方も、その意見を受け止める時、「あの作品を手掛けて、そこまで完成させた人だったら、ちゃんと受け止めて、自分にとりこんでいった方がいいのだな」と思いあえるような関係になっていったのではないかと思います。ここまで企画力の大切さを学んだきっかけについて申し上げした。

最後に自主性。自主性の大切さを学んだきっかけの一つというのは、インターネットを活用した情報共有です。企画書などで情報共有をメンバーですることは大事です。その時にこういうインターネットサービス、「グーグルドキュメント」を使って進めていきました。これの何がいいかと申しますと。インターネット上に、台本・報告書・プレゼンテーションの資料・音声ファイルをアップロードしていくことが出来ます。すると、インターネットさえつながっていれば、誰でも、どこでもアクセスできます。このようなサービスは非常に便利です。しかし、同時にサービスを使いこなすことを面倒くさがらずにチーム内への情報発信をすべきだと学びました。自分が何か評価をもらいたい、こういうことをやろうとしているんだけど、どうかな、という時には、このようにして、情報共有出来るようにする努力を、自主的に行うことが必要ではないかと思いました。

自主性の大切さを学んだもう一つのきっかけを申します。「一人ひとりが考えて動けるチーム。確かなシナジーの発生」。このことは、一人1企画を通じてメンバーに自信がついてきたことの現れの

一つだと思います。チーム内では、非常に突っ込んだ意見が増えてきました。プロジェクトの後半には。「それは違うんじゃないの？」とズバッと言うこともありました。そういった関係は一緒に企画をやって、仲間として活動してお互いに信頼を得てないと難しいと思います。そのような関係になるためには、普段から「自分が全力で取り組んで行く！」くらいの思いがないと仲間にも認めてもらえないし、仲間にも全力になって貰えない。そういった意味でも自主性は大事なのではないかなと思いました。

報告の4つ目、「PBL、つまりはプロジェクト・ベースド・ラーニングという形式から学んだこと」について申します。学んだことは、「チームワークの大切さ」、「基礎力の重要性」、「時間配分に関する意思決定の重要性」の三つです。

まずは「チームワークの大切さ」についてです。PBL形式でチーワワークを学べる理由として、社会人の方と実際に関わることが多いというのが一つだと思います。社会人の方々とかかわる中で、学生は自身がまだまだ半人前であることを自覚します。そして、その差を埋めようと、互いに補い合います。学生同士で、サークルのレベルで、チームワークで協力する、学生に発信する、となると評価してもらう相手も学生のわけです。時々、能力の高い方は自分一人でもやっていけてしまうかもしれない。けれども、社会人のプロの方々を相手にすると、学生というのは一人では一人前ではない。確実に。チームになっても難しいかもしれませんが。自分には足りないものがある、社会からみると絶対的に足りないものがあるということがはっきりと見えれば、互いに補って、チームでよいものをつくろうという気持ちが生まれるのではないかなと思いました。

学んだことの2つ目は「基礎能力の重要性」です。プロジェクトに取り組む時には、企画書等の文章をつくる能力、言葉にして相手に伝える能力など、基礎的な能力が必要だと感じました。つまりは、従来の座学スタイルの授業で学ぶことが出来る能力が、受講の前提になっているなと感じました。PBL形式という刺激的で、実働的なものに魅力を感じることも大事です。しかし、それまでの座学で学べる、レポートを書く文章能力、ゼミの先生にメーリングリストで伝える能力がなければPBLで学べることも大きく減ってしまいます。座学で基礎能力を付けてからこそのPBLではないかと感じました。

学んだこと3つ目は、「時間配分に関する意思決定の必要性」です。「花のキャンパスライフ」は、非常に過酷なものでした。正直なところ、私はこの1年間、「花のキャンパスライフ」に8割方、時間を使っていたと思います。しかし、チームメンバー全員が同じように時間を使えるかというと、決してそうではありません。実際に、このプロジェクト以外に「自身が活躍する場」を持っていて、プロジェクトを抜けて、そちらに帰って行く方もおられました。この体験を経て、「自分が将来どうなりたいのか？」、そして「その目標に対してどのように時間を使っているのか」ということを考えるべきだと感じました。つまりは、時間配分に関する意思決定を自身がしなければならないことを学びました。

報告の最後の項目です。「プロジェクト科目、PBLへの思い」。私は、後輩たちにぜひとも受講して頂きたいです。プロジェクトを通じて社会人の方と出会えることは大事な体験だと思います。なぜなら社会人の方と出会って、社会人の方から評価を受けて初めて大学生にしかできないことがあるということを感じたためです。私が新聞の取材記事にいった時に、裏千家の大宗匠にお会いさせて頂くことができました。茶道界の大人物を前にして、私自身、茶道を10年ほどやっていたこともあり、感動しました。取材が終わった後、担当者の他の方が、一言、「学生だからこそ、実現したことですね」仰いました。その時、「学生が誠意と熱意を持って取り組めば社会人にできないこともできるのではないか」と思いました。後輩の方々にもそういう貴重な体験をして頂きたいなと思いました。

思ったことの2つ目。PBL形式の授業が、どんどん増えていってほしいと思います。個人的な友人で、就職活動の際にこんな話を聴きました。「ああ、面接って難しいな。なんでだろう」、「友人に自分がしてきたことを話すのなら、簡単なのにな。」。彼は友人に話すような言葉づかいで、軽く、ライトに話すんなら得意なのだと言っていました。つまりは、面接の際に必要となるフォーマルな言葉づかいを学ぶ機会が無かったのです。PBLではフォーマルな場で、自分を表現する機会が沢山あります。なので就職活動の観点からも、是非お勧めしたいと思います。

ただ、先程も基礎能力が必要だと言ったように、「座って話を聴くのが面倒くさいから」「単に面白そうだから」というだけの理由でPBLを受講するのはおすすめしません。座学で基礎を学び、PBL形式で応用にチャレンジするという流れが良いのではないかと私は思います。もし、基礎能力が無い状態でプロジェクトに加入すると、自分のことで手一杯になってしまいます。すると他のチームメンバーの手伝いもできないわけです。それではチームで取り組むことの良さが活かされず、PBL本来の良さも引き出されません。

プロジェクト科目に携わっていた1年間は、大学生活の中で一番充実していた1年間だと思っています。このような機会を与えていただいた山田先生、PBLの教務課の皆様、社会人の講師の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

ご清聴、ありがとうございました。

山田　ありがとうございました。それでは引き続き中谷さん、お願いします。

報告２「映像の力・若者たちの見た京都」

同志社大学 文学部 英文学科 ４年生　中谷 しのぶ

皆様、こんにちは。文学部英文学科4年生の中谷しのぶと申します。前からみるとたくさんの方に集まっていただいているなと実感しています。今日のシンポジウムは在学生が主人公だといわれましたが、その高いハードルに負けずに精一杯、プロジェクト科目を通して学んだことをお伝えできたらなと思っています。

私は2年間、プロジェクト科目を受講しました。昨年（2009 年度）と今年（2010 年度）、その2年間とも学生リーダーを務めました。その観点からリーダーを通して、どういうことを学ぶことができたのか。「リーダー成長物語」をお話したいと思います。

私のプロジェクト歴ですが、3回生の時に『「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト』、4回生の時は「映像の力・若者たちの見た京都」プロジェクトを受講しました。常に2年間、自分に問い掛けていたものがあります。それはいいリーダーってどういうものなんだろう、どういう存在であるべきなんだろうということです。1年目はわりと仲間を、ぐいぐいと引っ張っていく引っ張り役としてのリーダー。そして2年目は見守る側、軌道修正をするというリーダーを務めました。2パターンのリーダーを体験しましたが、この2年間を通して、自分にとってもチームにとっても、最もいいリーダー像にたどりつくことができました。それが「メンバーの主体性を活かせるリーダー」。そのリーダー像に至るまでにどんな2年間を過ごしたのか、メンバーの主体性を活かすリーダーになるために学んだことは何なのか。2年間の活動を読み解きたいと思います。

1年目に参加した『「クラシック・コンサートを創る」プロジェクト』。プロジェクト科目は普通の授業と

は違って、最初から漠然としたテーマが決められています。私たちのこのプロジェクトの活動の目的は「京都のまちでクラシック・コンサート文化づくりを担い、今後に引き継いでいくために何を工夫していけばよいのかをプロジェクトチームとして具体的提案を行えるようになること」と決められていました。総勢10人の受講生がいて、皆、授業の一環ということで、定められたこのテーマに沿って活動したらいいんだという姿勢で取り組みはじめました。最初に着目したのが「これからの未来を担っていく子どもたち」。オーケストラを呼んでファミリーコンサートを企画しました。子どもたちにクラッシックを楽しんでもらうためにはどうしたらいいかと考え、企画したのが「未就学児も入場可能なコンサート」です。その他にも指揮者体験、楽器体験を含んだ参加型プログラムを企画しました。

そのとき、とあるクラッシック音楽のフリーペーパーを作成している同志社大学の院生の方に私たちはインタビューを受けました。その方にまず聴かれたのが、「この活動目的に対してなぜ、京都なんですか？」「なぜ数多くある音楽の中でクラシック音楽なんですか？」ということ。私たちは「最初から授業のテーマなので・・・」としか答えることができませんでした。さらには「この具体的提案をどういう形でするんですか？」という質問に対しても「ごめんなさい、まだ考えていません」と、なんとも頼りない答えしかできなかったんですね。そのインタビューを受けたのがなんと9月、春学期も終わっていた時でした。そこでようやくこの活動目的は、授業の目的だけであって私たちの目的ではないんだ。私たちの目的は私たちで考えなければいけないんだということに、気づきました。それまでのコンサートが自己満足で終わっていたということに気づいたわけです。早速、夏合宿をあわてて企画して、京都とクラシック音楽、どういうつながりがあるのかもっと考えよう、ということで初めて活動の目的を定める機会をもちました。

そこで見えてきた私たちなりの活動目的というのが「音楽のバリアフリー社会をめざしたい」というもの。京都には京都コンサートホールなどがあり、クラシック音楽が根づく土壌があります。それをもっと活かして音楽のバリアフリー社会を実現したい。そのためには京都市に私たちが考えていることを提案しにいこう、という最終目標を決めました。提案のために私たらはコンサートをして検証するんだということで、自分たちの活動の目的意識がここで初めてはっきりとしました。

続いて京都は学生のまちということから、学生対象のコンサートを企画しました。京都の大学に通う大学生を対象としたコンサート。クラシックを身近に感じてもらうためには打楽器コンサートというちょっと面白いクラシック・コンサートをやろうじゃないかと、企画しました。こうして1年間を通して2つのコンサートを行い、それらを通して、お客さんから集めたアンケートの結果やお客さんの声とともに、自分たちでコンサートを企画して見えてきた問題点等を京都市に提案しにいきました。そういう1年間を送ったわけですが、私は常に引っ張り役でした。2年目のプロジェクトではちょっと息抜きをしたいなと思って、最初はリーダーをするつもりは全くなかったですが、先生方から去年、リーダーをやったんでしょうといわれ、これは1年目の反省を活かすチャンス

かなと思い再びリーダーをすることにしました。

2年目の活動は「映像の力・若者たちが見た京都」プロジェクトです。14名の受講生がいて7名ずつに分かれて活動しました。私は14名のリーダーということで、副リーダーが2名、その二人がチームリーダーをしてA、B班で活動しました。私はA班に所属していました。プロジェクトのリーダーということでチームリーダーを支える影ながらのリーダーとして1年間活動しました。

その活動目標ですが、「若者が見た京都をテーマにドキュメンタリー映画を制作しよう」。A班は京都のフリーペーパーSCRAP社を追いかけてドキュメンタリー映像を制作、B班は「マンガ」を題材に制作しました。

これからお話する内容は主にA班の話になりますが、まず班のテーマを決めようよということで、授業のテーマを自分たちのものにする作業を最初に行いました。そこで問い掛けたのは「映像を撮る意義ってなんだろう」。私たちが出した答えは、「サービスは心にしか残らない。映像に撮ると面白いんじゃない？」ということでした。「目に見えるものではなく、目に見えない力を映像として残したいんだ」と文章化して目的を共有しました。続いて「何を伝えたいのか」に対しては、「京都を動かす若者の力を伝えて、京都は熱いんだよと伝えたいよね」と、これも意見をだしあって、言葉も選択して共有することができました。そんな中浮かび上がってきた取材の対象が京都のフリーペーパーSCRAP社です。この会社は社員が2名しかいなくて、他のボランティアスタッフで運営されているという、なんとも変わった会社です。フリーペーパーを作成していますが、同時にイベントも開催していて、SCRAP社を追っ掛けることで若者の力が撮れるんじゃないかということで取材対象に決めました。取材を行う中で9月20日に京都1，000人の宝探し大会という京都市内で1，000人を巻き込んでイベントを開催する情報を聞きつけまして、これを主に取材対象として選びました。

取材をしたり、撮影したりする中で、私たちが考えていた若者の力は、どこから沸いてくるかという視点で常にSCRAP社に接していたわけですが、イベント当日を迎えて撮影が一段落した段階の10月にすべての撮影が終了した後、もう一度自分たちのテーマを振り返る機会を持ちました。そして気づいたわけです。人々を動かす若者の力はアイディアを生み出す力なんだ。新しい視点を持つ力がSCRAP社にはあった。それを見てくれる人に新しい視点を持つことで新しい京都が見えてくるんだと、その若者の力を伝えたいと、4月に決めたテーマを、さらに焦点を絞って自分たちのテーマにしました。

もともと撮ったドキュメンタリー映像は大学におさめられると決まっていましたが、これを何とか発信したいということで上映会を企画していました。同志社大学クローバーホールでの上映会で、A班、B班それぞれつくった映像を20分間でドキュメンタリー映像として流しました。上映会のアンケート感想、私たちが伝えたいことがちゃんと伝わっていたのか、京都を盛り上げようとするムーブメントを学生が担っていたことを知って「関心を持てた」という意見や「もう一度京都を新しい視点で見てみたい」という意見をいただくことができました。グラフを見ていただくとわかるかと思いますが、9割方の人に「満足しました」という意見をいただくことができました。

2年間を振り返って私が学んだ主体的なチームづくりにおいて大切なことベスト3をご紹介したいと思います。ポイントの1は、「プロジェクト活動の目的を早い段階で確立して共有する」ということです。1年目の『「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト』ではこの3つの点を問い掛けられたわけです。なぜ京都で、なぜクラシック音楽、最終目標の提言はどういう形でするのかと。問い掛けられて自分たちのテーマが決まってないことに初めて気づいたわけですが、実はそれまで話しあいをしていても、なんだか皆の意見か出てこない。私はその当時、グイグイと引っ張っていくリーダーだったので、なんとかして皆の意見を生み出しやすい環境をつくりたいと思って、話し合いの机の位置を変えてみたり、お菓子を持っていって和気あいあいと話をしようよ、という工夫をしましたが、そんな表面的な工夫では効果がなくて、話し合いも、どんよりとした雰囲気がずっと続いていました。

でも、インタビューを受けて、この質問をされて、自分たちの活動目的がはっきりした時に、一人ひとり、ちゃんと顔を上げて自分の意見をいってくれるようになったんです。京都市に提案する活動目標を掲げてから、もっとこうしたらいいんじゃない、ああしたらいいんじゃないと、いきいきと話し合いをすることができるようになりました。2年目の映像プロジェクトにおいても、そうでした。失敗した1年目、2年目のプロジェクトで最初にテーマを自分たちのものにしなくちゃいけなという意識を持って文章化することで自分たちのアイディアも生まれやすく、何かあっても、この軸に戻れる、安心感があって、どんどん意見が出るようになりました。

ポイントの2つ目。それは「一人ひとりのメンバーと向き合う環境づくり」です。プロジェクト科目は普通の授業とは違って授業外の活動時間も多いです。期間限定の中でミッションをクリアしないといけないという課題があります。「授業の一環のはずなのに、なんでこんな時間をかけてたくさん活動しないといけないの、もっと部活をやりたいのよ、もっとサークル活動やりたい、もっとバイトしてお金稼ぎたいのよ、私、就職活動忙しいのよ」と皆、いろいろな事情を抱えている人たちが集まっているわけですが、それが引き起こす優先順位の違い、モチベーションの違いがあります。ここで、とあるエピソードをお話したいと思います。1年目のプロジェクトで、わりとおとなしめで、普段からあまり意見をいってくれない人がいました。グイグイ引っ張るリーダーとして「もっと参加してほしい」と思い、2回目のコンサートで、その人にちょっと役割が大変な係をお願いしたんです。そうすると責任をもってやってくれるだろうなと期待してお願いしたんですが、ぜんぜん活動の進展がみられない。そのうちに夏休みに入ってしまい「どうなっているの？」とメールなりで催促をしたわけですが、ある日、突然プツッと連絡がきれてしまって全く返事か返ってこない。着信拒否まではいかないですが、拒絶されてしまったわけです。後で聞いてみると、行き詰まってしまっていて、逃避行で一人旅にいっていましたといわれてしまいました。逃げられてしまったんですね。よくよく後で事情を聴いてみると二つのプロジェクト科目を受講していて、一人で大変だったという事情が見えてきて、私は空回りしていたわけなんです。

そういう反省も活かして、2年目は最初から相手のペースにあわせた役割分担が適切なんだと気づきました。今、その子がどういう状態にあるのか、それが無理なら他の人に回す、皆で支えあうという姿勢を貫いたんですね。そうすると、一人ひとりに合わせた役割分担をすることで本人が、とてもやる気になります。やる気が生まれると、その場にいることが楽しくなって、同時に責任感も生まれる。楽しいと積極的に参加したり、意見を言ってくれたりします。多少なり、役割分担にハプニングがあったとしても、互いに補いあう姿勢があると信頼感が生まれてきます。そうすることで一人ひとり安心して自分の役割を果たすということができるようになりました。

最後のポイント3つ目。社会的意義を活動の前提に持つことです。プロジェクト科目はもちろん授業の一環です。でも社会に発信するという前提を持つからこそ、1年間の活動が生きてくるということを感じることができました。1年目の『「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト』も京都市に提案するんだという最終目標がなければ、二つのコンサートをして、来てくれた人にコンサートをお届けしましたよ、満足した、楽しかったといってもらえました、ということで自己満足で終わっていたかもしれない。でも提案があったからこそ、寄せられたアンケートでお客さんの声であったり、自分たちが気づいたことを投げかけるチャンスとなった。一つひとつ工夫したコンサートが生きてきたわけです。2年目の映像プロジェクトでは、完成したDVDは大学におさめられるということでしたが、クローバーホールの上映会を行ったことで、ただ単に映像をつくるという技術を学んだだけではなく、自分たちの訴えたいものを、いかに相手に伝えることができるかという社会の目線で映像をつくることができたように思います。社会発信がもたらすのは自分たち一人ひとりの活動理由の明確化、そしてただ単なる自己満足の活動だけではなく、裏付けのある活動だと私は思います。

常に私は、いいリーダーってなんだろう、どういう存在であるべきなんだろうと考えていたわけです

が、以上ご紹介した3つの大きな学びを通して、私は主体性のあるチームを運営する力を、この2年間で得ることができたんじゃないかなと思います。この2年間、プロジェクト活動を通して、本当にかけがえのない仲間を築きあげることができました。そしてきっと、これから社会に役立つんじゃないかなというこれらの大きな学びを通して、こういう機会を与えてくれたプロジェクト科目に、スタッフの方々に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございます。

山田　力がこもりすぎて。PBLというのは面白いものでしてね、いろんな振り幅があるということを今日、お話を聴かれておわかりになられたと思うんです。後半の中谷さんのお話の中では、チームの力で、どれだけ成長できるか。チームと個人のスキルのバランスが面白くて、チームそのものが、どういうふうに個人のスキルを引き上げてくれるか。北村君の方は、逆に個人のベースのスキルが高まってきたら、そのことによってチームが活性化していったり、もとに返っていったり、いろんなバランスの中で多様に多彩に展開されていくようなところが強いのだろうと思いました。

■質疑応答

山田　この二人の発表、二人の活動、その中で学んだことに関して、このへんはどうなんだろうと、お気づきの点、あるいは確認してもらいたいということがございましたら、挙手をしていただいて直接、学生に答えてもらいたいと思います。いかがでしょうか。

会場　報告をきかせていただきまして、すばらしい取り組みをされているなと感じました。お二人もゼミをとられていると思いますが、プロジェクト科目とゼミとの違い、ゼミ活動に与える影響、プロジェクト科目を受講することによって専門科目に対して、どういう影響を与えてきたか。いい影響についてゼミ活動も含めて。このへんを教えていただきたいと思います。

中谷　ゼミとプロジェクト科目は学びが違うと思います。ゼミは自分の興味のある部分に対して掘り下げて学んでいく場。プロジェクト科目は、全く何もないところから新しいメンバーが集まって一からものを築きあげていくというスタンスの違いがあると思います。一つだけ共通して学んだことは、なぜそのことをしたいのか、なぜ活動目的があるのかという、ものの見方を、プロジェクトで得ることができました。学びの方でも勉強の方でも、そのことを活かすことができたと思いま

す。

北村　3回生で、ゼミで学んだことが4回生のプロジェクト科目をやってみて役に立ったなと思います。3回生のゼミの時、論文を1本書きまして、ちゃんとした表現の文章を書くことを学んで、過不足なく伝えようとするとこういう文章になるんだということを知りました。しかし、プロジェクト科目でそれをやってみると、今度は量が多すぎて、「ワンフレーズで言わねば！」、ということも多々ありました。ゼミで学べることが基礎力で、PBLで学べることが応用力ではないかと思います。

会場　プロジェクト科目の教師の役割について。どういうことをされているか。単位をとる時の評価について教えていただければと思います。

北村　先生の役割、今日、お越しいただいていますが、田原先生という元テレビ局プロデューサーの方が講師で、スタンスは学生にすべて任せて頂けました。とりあえずやってみて、実際に公共の電波に乗るものなので、やってはいけないことだけは注意する。「自分たちで挑戦してみて、そこで感じた疑問とかを、まず自分が解決していこう。出した答えが間違っていたら教えるよ」と。学生の自主性を信じていただけたと思います。

単位の評価法は、春学期と秋学期の最後に、全く新しい企画書を出して、それをもとにしたプレゼンテーションをして、企画をつくるのに、どれくらい総合能力がついているかを基準にされました。チーム内に情報能力する能力がついているかの指標ということで評価をしていただきました。

中谷　大学の先生は科目代表者としていらっしゃいます。映像の技術とかは「NPO京都の文化を映像で記録する会」の元プロフェッショナルな方に教えていただきました。テーマは自分たちで決めて、映像ですので、こういうことはやってはいけないんだというご指摘をいただいたり、こういう方向性でいくならば、そういうことは伝わらないのではないかというアドバイスをいただいたり、という役割を担っていただきました。評価方法については、多分、積極性とか話し合いに参加する割合とか、企画書の評価もあったと思います。

会場　プロジェクトに参加したけど、脱落したという方いませんか？

北村　この問いには、私どものプロジェクトが適切だと思います。最初、年度始めにメンバーは16名いました。2、3、4回生揃っておりました。しかし、半年たちまして3、4回の8人になりました。2回生の方はそれぞれ自分のフィールドに戻っていかれたということで、決してやりたいことがないわけではないですが、より自分に合うところを探していかれたということです。

中谷　1年目は脱落者はいませんでした。2年目は一人だけ前期でやめました。個人的な理由です。時間がとれなくなったという理由です。

山田　脱落者数でも個性が出ているということでしょうか。それでは後半のシンポジウムで、大いに質疑応答ができる時間を設けておりますので、その時にご質問いただければと思います。それでは少し休憩させていただきます。どうもありがとうございました。

■第３部　シンポジウム
「ＰＢＬ教育を考える～提言者・在学生・卒業生の視点から～」

株式会社ニッチモ 代表　海老原 嗣生
読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者　松本 美奈
鳥取環境大学 事務局 キャリア支援課　三宅 将史
京都市立松尾中学校 英語科教諭　安本　梓
同志社大学 法学部政治学科４年生　北村 龍弥
同志社大学 文学部英文学科４年生　中谷 しのぶ
＜司会＞ 同志社大学 ＰＢＬ推進支援センター長 文学部教授　山田 和人

司会　第3部シンポジウム「PBL教育を考える―提言者・在学生・卒業生の視点から―」を開催いたします。ご登壇いただきますのは株式会社ニッチモ代表取締役・海老原嗣生様、読売新聞東京本社編集局教育取材班記者・松本美奈様、2010年度プロジェクト科目受講生・法学部4年、北村龍弥さん。同じくプロジェクト科目受講生・文学部4年、中谷しのぶさん。私たちプロジェクト科目受講生の先輩であり、本学卒業生であります鳥取環境大学キャリア支援課・三宅将史さん、京都私立松尾中学校英語科教諭・安本梓さま。なお第3部の司会は本学PBL推進支援センター・山田和人センター長にバトンタッチいたします。山田先生、よろしくお願いいたします。

山田　それではシンポジウムに先立ちまして、三宅さんと安本さん、プロジェクト科目を受講されて学んだものが、今、どんなふうに活かされているか、お話を最初にしていただきます。お二人からそれぞれどのようなプロジェクトに取り組んだのかを報告していただき、それを受ける形で、全員、登壇をいただいてシンポジウムに入りたいと思います。まずは三宅さんからよろしくお願いいたします。

三宅　2009年度生文学部卒で現在、鳥取環境大学キャリア支援課に勤務しております三宅と申します。今日、このシンポジウムでご報告をするのが、念願でした。2007年度と2008年度は、受講するプロジェクトが報告する機会はあったのですが、僕自身の都合がつかなくて参加できず、2008年度のシンポジウムでは、現在勤務する大学の採用試験があって残念ながら出られませんでした。

プロジェクト科目との出会いは、京都らしい科目を受けたかったのが動機です。せっかく京都で学生生活を送るのならと思いました。教室ではなく学外、京都をフィールドにしてナマの現場で学ぶことができるということでプロジェクト科目を受講しました。2007年度は『量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通』というプロジェクト、2008年度は『私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう』というプロジェクトです。

2007年度『量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通』のテーマですが、京都市内は寺社仏閣の資源がありますが、京都市外に新しい観光はないか、飽和した京都市以外に何か新しい観光はないかということで活動をしてきました。春、秋学期の通年科目でした。春学期には3チームに分かれて亀岡市、井手町にニューツーリズムの企画で出掛けました。最初は何も知らないところなので、京都の観光資源として、どういうものがあるか、観光について学んだり、高台寺に行って観光の現状を教えていただきました。実際に学んだことを活かして亀岡市、井手町にフィールドワークに行ってきました。各フィールドに出て、あたためていた企画をブラッシュアップするために、また新しい観光資源を発掘するということでフィールドに出ていきました。春学期の成果として、売りたいものを売れるようにと亀岡にやったんですが、その後、それが形になって「Leaf」という雑誌とタイアップして、一つの雑誌の記事になって世の中に出ました。

次は亀岡と井手町をテーマにする二つのチームに分かれて活動しました。トロッコ列車の終着点で保津川下りで有名ですが行ってしまったら、そのまま帰ってしまうという問題点をどうにかできないかと思い、目をつけたのが亀岡祭を盛り上げるイベントの企画です。「Leaf」誌で亀岡祭の特集を企画しました。祭当日、JR亀岡駅で市民の笑顔の写真のムービーを100枚集めて上映しました。南郷公園に保津川沿いにキャンドルを設置したり、道路から公園に行く道には竹灯籠を設置しました。これが当日の写真で結構大変でしたけど。これをやってよかったのは、小学生たちが自分たちが描いた竹灯籠、どれかなと見に行って家族づれで来てくれたのがよかったなと思いました。もう一つのチーム、井手町ですが、亀岡市が終わって井手町に活動にいきました。僕は亀岡チームで頑張っていましたが、燃え尽き症候群になってしまって、あまり井手町に参加できなかったのが悔やまれるところです。その頃に、プロジェクトが停滞して、これからどうしようという苦労があった頃です。

井手町では「Leaf」誌と共同してモニターツアーを実施しました。この紙面が掲載されて、地元ツアーと諸団体と連携してツアープログラムをつくりました。モニターツアーを、その後、実施しました。モニターツアーの時、国土交通省の「ニューツーリズム創出・流通促進事業」で国交省から補助金をもらってツアーを実施しましたし。

2007年度、僕が亀岡に熱くなって、その後のプロジェクト活動を、十分に果たせなかったという反省や悔しさもあり、翌年、もう一度プログラム科目に挑戦しました。2008年度は「私の着てみたい着物をプロデュースしてみよう」というテーマです。着物業界が衰退していく中で、どうやって問題点を発掘して解決方法を見いだし、最終的に着てみたい着物をつくってみることがゴールでありました。着物のことを

基本知識の習得で、いろんな人の話を聴きました。教本を読んで勉強しました。その後、現場の視察、体験学習に行きました。友禅の描いている工場にいったり、さらに深めるためのアンケートを実施して、大学生が着物をどう思っているかを確認しました。その後、市場調査で店にいったり、まちなかで、コンセプトを作成しました。そのコンセプトを発表したところで春学期の終了です。

秋学期は着物が楽しいという若者を増やすことが大事だと思いましたので、着物をつくるだけではなく、情報発信をやってみようと思いました。両側面からのアプローチでやっていきました。情報発信ですが、同志社 EVE という大学祭に出展して、着物をコーディネートして展示しました。さらに今までためていたデザイン画の展示、人気投票アンケート、若者に着物を気軽に着てほしいと、着付け体験を実施しました。その中で自分たちがつくった製品が受け入れられるかを検証したり、着物を身近に感じてもらえるようになったと思います。学内だけではなく、学外の人たちにも活動を知ってもらえるきっかけになったと思います。プロジェクト科目を知らない学生に、プロジェクト科目はこんな科目なんだということを知ってもらえるきっかけになったと思います。これが実際に展示したものです。そして着物の制作を実施しました。調査から得られた問題点から着物の商品化を模索してつくりました。企画書をつくって、実際にイメージしてもらうためにフォトショップを使って配色して試作品の検討を行いました。それにあわせて着物のコーディネートも考えました。これも絵で見ていただきますと、染色工場はこんな感じです。柄を選択してひな型にあてこんで、配色をして5つの着物が完成しました。これがコンセプトマップです。こういうコンセプトで着物をつくったということです。エスニックフラワーという柄が同志社の EVE 祭でアンケートをとった中で一番の人気でした。

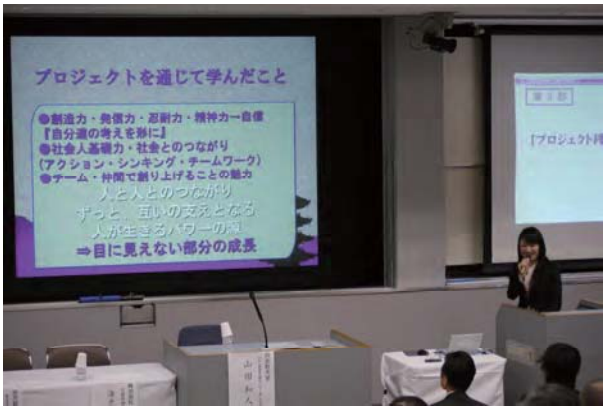
2年間のプログラムを通しで目標設定を明確化し、長期的、中期的、短期的な目標を設定してやっていかないといけないということを学びました。主体的に取り組んでいく姿勢が大事だということです。目標に向かって進めていくために共同していくチームワークも同様です。着物プログラムでは副リーダーでしたが、リーダーのような役目をしていました。プロジェクト活動を活性化するために、チームの誰かが頑張ったら、皆で褒めていこうねということをしました。京都に興味があるからとか、現場を見てみたいと思ってましたが、だんだんと目標に向かってなしとげるための共同で進めていく力、チームワークが楽しいなと感じました。1年目よりも、2年目は、こういうことがほしいなということでプロジェクト科目に取り組みました。

卒業後、プロジェクト科目でえたスキルを仕事に活かしているかという問いに対しては、現在進行中です。これはもう一つの課題だと思いますが、今、この仕事についたのもプロジェクト科目のおかげだと思います。就職活動をやっていたんですが、この業界につきたいと思ってギリギリまで就職活動をして、当時のこのシンポジウムも欠席して、今の職場につけることができました。現在、キャリア支援課ですが、いわゆる学生課と呼ばれる部署で学生さんの課外活動を支援するところですので、学生を元気にするためにPBLを活用したいと思っているところです。ありがとうございました。

山田　引き続きまして安本さんに報告をお願いします。

安本　こんにちは。私は、同志社大学のサークルの一つ、同志社交響楽団でフルートを吹いていました安本といいます。先程の発表でオーケストラをつくる企画をした時に、京都でクラシックを広めようとしていることを考えている人に「どうして京都で、なぜクラシック音楽を、最終目標は何ですか？」という質問をした女性の友人でして、そういうところからも縁を感じてしまいまし

て、今日の自己紹介、こっちに変えようと。私は今、京都市立松尾中学で勤務していますが、自己紹介をする時、「はじめまして、京都市立中学校勤務をしています安本です」というのと「同志社交響楽団のOBです」というのと、今までに3カ所の大学で学生をしていたことがありまして「同志社大学文学部英文科の安本です」というのと「京都教育大学大学院生の安本です」



というのと「神戸親和女子大学の安本です」というのを言いますと、同じ人間ですが、自己紹介した相手の反応が大きく変化します。社会というのは、人を判断するのは表面とか経歴になるので、そこがわかりやすいとは思いますが、そうではなくて大事なのは、その人間が持っている心とか、核心だと思っています。

私は2007年度『子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト』に携わっていました。役割としてはたくさんの分野の人と人をつなげるということに深く携わりたいと思って、渉外担当をしていました。最初にプロジェクトをまとめた映像をごらんください。（映像）

私自身は今、中学校1年生の担任をしつつ、吹奏楽部の顧問として指揮を振りつつ、英語の教科で言葉を通して自分自身を見つめなおす子どもをつくりたいなと思いつつ、単語一つ教えるのに苦労しながら過ごす毎日です。私のいました、このプロジェクトは、もともと「子どものための京都職場図鑑作成」という名前に引かれて集まった9名のメンバーでプロジェクトからスタートしまして、最終的には7名のメンバーで最後まで作り上げました。プロジェクトのメンバーは、現在、高校生向けの大学、専門学校の情報をまとめる雑誌の編集するもの、プロジェクト科目で学んだことがきっかけでお茶の会社に就職したもの、大学院に進学し病院勤務につくもの、後輩の学生たちにプロジェクト科目を広めたいと大学職員になったもの、プロジェクトを通じて自分自身で自分の考え、説明する力を身につけて関東の金融機関で働くもの、考えの違いや方向性でプロジェクトを途中でやめたメンバーもいましたが、その後、別のプロジェクトで活躍し、現在は小学校で勤務するものなど、それぞれ、この科目で経験したことを活かして社会で活躍しています。

さて、私たちのプロジェクトは、その目的として「一人ひとりの個々の成長」、目標として「子どものための京都職場図鑑の作成の達成」できるように1年間活動しました。本日は、この二つについて、お話をさせていただきます。

一つ目、これが私たちの1年間の達成度グラフです。一番大事にしたのはコンセプトづくりです。春と秋学期に半期に分かれている中で、私たちのプロジェクトの一番基盤となるコンセプトづくりに半年近くかけました。一度つくったコンセプトを、もう一回建て直すことをしたのですが、プロジェクトを最後まで、ぶれないように進めていくために、『何のためのこれをつくるの

か』、全員が意思を共有できるまで話し合ったんです。職場図鑑は冊子にするのか、ホームページにするのか、京都の職場といっても半導体を扱う企業から伝統工業まで幅広い職場の中で、どの職場を伝えるのか、それを自分たちでコンセプトが大事だと思って考えていきました。例えば、全員で話しあってたくさんの意見を出すために2チームに分かれて話しあいをし、週1回、コンペ形式で意見を出し合ったり、会計、渉外、デザイン、取材などをグループで手分けし各自の仕事をこなしたり、常に今の自分たちにできるペースと役割分担を考えてプロジェクトを進めてきました。メンバーの留学、インターンシップ、そして学業や、他のやりたい事との兼ねあいで、常に自分たちにできることを話しあいながら進めていきました。その中で私たちが大事にしていたのが、全会一致で皆が納得するまで話し合いたいという事、他にはない自分たちだけのオリジナルの図鑑を作りたい、ということです。その中で2回のコンセプトの考え直しを経て、最後に出てきたコンセプトが「京都文化にふれる図鑑～伝統産業に携わる人の誇りを通じて～」です。伝統産業に携わる人の誇り、心意気に注目したい、と思いました。図鑑は、読み物としての本ではなく京都伝統産業を扱う社会の勉強で扱う小学校4年生の社会科学習の補助教材として、調べ学習用の図鑑をつくろうとしました。取り上げる伝統産業も京都にはたくさんあるんですが、その中から茶道文化に特化したものをつくろうと思いました。それは、茶道・京舞など、京都にある一つひとつの『伝統』の文化は、それに関係するたくさんのもの・人に支えられてなっているのではないか、という考えからです。形式としては冊子の形の図鑑と職人さんを取材したDVDをつくろうということにしました。前期かけてコンセプトをかため、夏休みから職人さんに渉外をはじめ、お会いして取材をさせていただきました。人の縁ですが、私たちの講座を担当してくだっていた株式会社「空」代表の遠藤さんから、裏千家の金澤宗維先生に塗師の中村宗哲さん・釜師の大西清右衛門さん・茶園園主の小山元治さん・御菓子師「末富」の山口富蔵さんをご紹介いただきました。その中で、インタビューをどういう内容とレイアウトでするのかという意見が、職人さん達に伝わりにくかったので、私たちの思いを具体的にデザインしていきました。手書きでつくって、インタビュー内容をつくりまして、取材を重ねましたが、どんな取材をする時も立ち返ってくるのはコンセプトだったんです。「人の心に触れる図鑑をつくる」ところに常に戻りながら作業を続けていきました。常にメンバーの一人ひとりが3つ4つの仕事を担当して役割分担して、図鑑のどのページを誰が担当して、どういう仕事をするのかというグラフをつくったり、今、何月何日で、終わるまで何日しかないから、どうしないとあかんとか、相談したり、これでは日が足りない、合宿が必要だとセンターにいったりして、どんどん月がたっていきます。プロジェクト科目にはそれぞれ予算があるんですが、私たちの場合は、図鑑印刷費、ライター、デザイナーをプロの方に委託し、自分たちの力量・時間との兼ね合いを調整しながら、プロジェクトを進めていきました。また、私たちが調べたお茶の世界の産業を紹介するのをきっかけに、子どもたちに自分が行きたい伝統産業を調べてみようというところまで持っていきたかったので、72ある伝統工芸品の中から一人ずつ職人さんをリストアップさせていただき、アポをとって図鑑の中に掲載させていただいたりもしました。そういう作業を経て、図鑑の印刷、同志社大学での報告会、シンポジウム、その後、小学生に授業の形として図鑑を提示したいと。同志社小学校の先生方にご協力いただきまして、小学校で模擬授業をさせていただく機会もいただきました。小学校4年生の社会科で伝統産業がありまして、その教科書＋この図鑑を使って、より生きた産業についてわかるよ、という授業の提案をさせていただきました。

そうして完成した中身、内容は、茶道に携わる5つの分野の職人さんの気持ちに注目したところが独特のところです。現存する図鑑を見ていきましても、つくっている人が、どういう気持

ちで、普段、何を考えて作業をしておられるか、既存のものでは見えてこなかった。人がやっていることであり、人が使うものをつくっておられる、長い歴史の中で伝統を受け継いできているということで気持ちが大事なのではないかと考えて、その部分に注目しました。

プロジェクトの成果としては思い描いていた以上の得るものがあったねと。最初、心にあったコンセプトは、ただものを知識として知るだけではなく、伝統工芸を一つひとつつくっておられる人の誇りを知ることで、子どもたちに知ってほしいことが子どもたちの中に芽生えていたということが大きかったなと思いました。このプロジェクトを通して私たちが何を学んだか。成長という意味で、それぞれが大学から社会に出る就職活動の場で得た知識、姿を応用して活かしていけたということ。プロジェクトの魅力として、以下の点があるのではないかと思います。一つは、一つのテーマからメンバーで想像力を膨らまして具体的なプロジェクトの全体像をつくりあげ、さまざまな媒体を通じて社会に発信していくことができる。それによって社会において自らの考えを形にする経験ができて、それが自分たちの自信にもつながるという、忍耐力、精神力、生きる力がつけられるのではないか。大学、企業、地域の方々とともに授業を進められる点で、社会とのつながりを持って、それを自分たちのやり方次第で、どんどん広げていける。社会人としてのマナーをはじめ、チームで考えて行動を起こす、アクション、シンキング、チームワークで、社会人基礎力も養えるのではないかと感じています。何よりも、回生、学部、学校という従来の域を越えて、チーム、仲間で活動して大学内外のたくさんの人とつながっていけるところが、このプロジェクトの魅力ではないかと考えています。私たちも現在、連絡をとりあって、いい関係が続いているんですが、プロジェクトはずっと互いの支えとなる人が、生きていく最大のパワーとなる、人と人とのつながりを築けることが、PBL型の学習の醍醐味ではないかと考えています。

最後に、私たちのプロジェクトで途中で脱退してしまったメンバーですが、ある熱い青年のメッセージをお伝えしたいと思います。「PBLというのは、自分の目には見えへんけれども、内面の成長がたくさんできるものなんだと思うし、これからもちょっとでもたくさんの人にこの考えを持ってもらえたらいいな」と。

私自身、山田先生の言われるように、ちょっとでもたくさんの人とのかかわりを持ちながら、社会全体の表面とか、経歴とか、皆が言っている意見に流されることなく、自己肯定感を持ちながら楽しく生きていけるような社会を形成する子どもを育てていけたらな、と思っています。今までお世話になった方々に感謝しつつ、今日、この場に来させていただいたことをありがたいと思っています。ありがとうございました。

山田　安本さんの問題提起を受けて、提言者たちがいろいろな話をしてくれるだろうと思います。それではお待たせいたしました。提言者のお二人、在学生の二人、卒業生の二人、ご登壇いただけますでしょうか。それではよろしくお願いいたします。

今、在学生のプロジェクト、卒業生たちの現在について報告をしてもらいました。安本さんがこんな一つのまとめをしてくれましたこともあります。これを受けながら、今日は、PBLは社会で役に立つのかということで、大いに議論が弾んでいくことを期待しております。今日はホンネトークでいきたいと思っていますので、皆さん方からのご質問でも赤裸々な事実が語られ、シンポジウムならではの面白さを引き出していきたいと思います。

提言者のお二人に、冒頭で一つのお考えをお話しいただきました。今日の学生たちの取り組みをどのように受け止められ、ご提言をいただいた内容と、どんなふうに重なってくるか。ぴったりだったと思われる部分や、ちょっとがっかりしたかな、という部分とか、率直なところを、海老原様、松本様からお話を伺いながら、同時に先輩の報告を在学生が受けて、あるいはその逆のやりとりもあろうかと思いますので、後輩から先輩へ、先輩から後輩へ、遠慮なく話に加わってもらえればいいなと思います。まず海老原さんからお願いいたします。

海老原　非常に面白かった。面白いし、すごいなと思いました。私は年間1，000人近くの学生の面接をしていますけど、こういうふうに物おじせず理路整然と話せる人は少ない。4人が4人とも話すのがうまいので、このPBLは話の特訓になるのかなと第一印象を受けました。二つ目、世の中の動きはシームレスな課題にシームレスな力で取り組まなきゃならない。ここのところに関しては完全に及第点が上げられるのではないかなと感じています。さあ、コンサートを開く、さあ図鑑をつくる。

どうしたらいいんだろう。絵図が見えないです。会社でも、さあ、売り上げを上げなさい、企画をつくりなさい、新規事業をつくりなさいという時、絵図が見えない。教科書の何章を読んで、そこから答えを見つけなさいという世界ではないから絵図が見えない。そんな課題を与えられた時にどうするか。それに対して工夫されて、皆、うまくいっている。絵図がない課題を与えた時にどうやるかという力は確実についたのだろうと思います。

その時に必要になるのは自分の力ではできないから共同推進力が必要になる。普段は、せめぎあいを、ほとんど学生はやってないです。サークル活動で厳しいことをやったら、やめてしまう。バイト先でもあまり厳しいことをいったら、やめてしまう。そういう環境の中で、いい過ぎると来なくなるし、言わないと放任になる。この間合いをうまくとっていく共同推進力はついたんだろうと思います。社会に出て、二つとも、有効だろうと思います。

ここまでは、産業側からみたら、うれしい話がたくさんありました。1点、贅沢を言いますが、今後の課題として、先生たちにお考えいただきたい点は、評価ポイントです。コンサートを開くことも、図鑑を納品することも最終目標ではありません。それは手段でしかない。本当の目的とは、それによって獲得できることは何か。お客は何か、でしょう。最後の彼女が、「小学校4年生が○○を気づいてくれること」を目標として掲げてました。そう、図鑑を作るではなく「○○」に本当に気づいてくれていたかどうか、それが評価ポイントになると思います。気づいてくれるような作品ができたと思います。これはマスターベーションです。本当に気づいてくれていたのかどうか。そのメルクマールは何か。それで評価する。これか評価だと思います。先生方にはそういうシビアな評価をお願いしたいです。

社会に出たら、いくらマスターベーションで、いい企画をつくっても、売れなかったら終わりです。もしくは、社内で企画が通らなかったら終わりです。社内を通して初めてOK、売れて初めてOK。これが社会だと思います。

とすると、作っただけの自己満足だと、ダメ。ここで否定されるわけです。教育と社会の一番の違いは自己否定ですよ。自己否定が毎日のように起こるのが社会。苦しさのある裏返しで、楽しい。否定されるし、ケチョンケチョンにいわれるし、これだけいいものをつくっているのに「なに、こんなもの、バカじゃないの」と言われる。これか社会です。その時に企画が通るから、僕らは、うれしい。つまり、苦しさの再現もしないといけない。自己否定の再現もしなければいけない。その部分、自己否定されるのが社会であり、それを乗り越える練習も、ぜひこの教育でしてもらいたいと思います。

山田　安本さん、いろいろ出ましたけど、一言。反論でもいいですよ。

安本　本当に勉強になります。

山田　自己否定という言葉が出ましたね。プロジェクトを進めていく上で、そういう局面はなかったでしょうか。

安本　局面はありました。プロジェクトを進めていく上ではあまりなかったです。わりとプロジェクト科目をとる学生はやりたいことを明確に持っていて、意欲旺盛で自分の力をどんどん活かしていきたいという学生が多いので、プロジェクトの中での自己否定はあまりなかったんですが、学校の現場にいて思うのは、自己否定をする子が多いなと思うんです。自己肯定感を持っている人は、もっと自分にないところを先輩とか社会の人から受けることで、また新しいエネルギー

になるからいいと思いますが、最初から自己肯定感を持てない子どもに対しては、できるところから肯定することから始めたらいいのではないかなと思います。ただ、どうせ自分はできへんからと、そのまま前向きに生きられないのは子どもだけではなく、高校生の若者でも多いですし、厳しい荒波の中で生きてこられた方にしてみると、そんな甘くて、どうするねんという感じだと思いますが、いわれることは、その通りだなと思います。

山田　　自己否定というか、自己批判の姿勢みたいなものが皆さん方の中で育ってくるような面があるのかなというニュアンスだったかもしれないですね。PBLの持っている教育力があると思うので、その教育力のいろんな側面に、これから議論の焦点があたっていくのかなと思いますが。それでは松本さんお願いします。

松本　　４人の方の発表を聴いていて驚きました。まずパワーポイントです。きれい。お話がとても上手。発信力、社会人基礎力のアクション・シンキング・チームワークの中のアクションのところ、きれいに発信する。意欲的な発信という意味では満点だと思います。私は終始、すごいなと、素敵だなと思いつつ、社会人基礎力に終始しているではないかという疑問も禁じえないのです。すごいなと思う反面、ふつふつと疑問が沸いてきてしてまって、じゃ、この学びが、ここで学んだことが、どうあなたたちの人生の学びに返っているのか。アクション・シンキング・チームワークという社会人基礎力以外のところも聴きたいと思って、ずっと待っていたら、中谷さんでしたか、「なぜというのが、いつでも出るように勉強に活かされるようになった」と、たった一言しか出てこなかった。私は、そこがひょっとしたら山田先生の方から、それがどう学びに活かされたのかということをきちんと言いなさいと、自分たちで考えなさいと、PBLの神髄に則って自分たちで考えなさいと読み取ってほしかったのかもしれないけれど、それが、まずなかったことが違和感として残りました。それが第一点。

　それなら専門はいらないだろうかと思ったのがもう一点です。こういう学びを否定しているわけではないですが、これは大切なことだと思います。今までの教育ではできなかったこと。だけど、これを突き詰めていくと大学に専門はいらなくなるのか。そんな疑問と、頭の中で整合性がとれないのです。シームレスであるのは、よくわかる、だけど、これはサービスラーニングではないから、そもそも専門から発して、社会に出して、また返ってきて、さらに専門を磨くというやり方ではないから、それはあたりまえだろうといわれれば、そうかもしれない。けれども、どう自分の専門に返るのか、今、大学の先生方が皆さん、一生懸命やっていらっしゃる。自ら学ぶ人材、ここにどう反映されていくのか、正直いえば、今日は、よくわからなかったのです。もっとこれがこれからの話の中で伺えれば、私の中で納得できる。プロブレム・ベースド・ラーニングとプロジェクト・ベースド・ラーニングがあって、あえてこちらではプロジェクト・ベースド・ラーニング、社会に力点をおくのはわかります。でもやはりラーニングであるならラーニングをどう返していくか。将来学んでいく力に、どう関与しているのかというのを、伺いたいなと、ぜひ思っています。

生意気なことを申し上げました。

山田　とても面白い問題提起だと思います。社会人基礎力という言葉が、たまたまあって使っているわけですけど、実はプロジェクト科目の中では社会人基礎力というのはほとんど使っていません。PDCAサイクルという言葉も我々はほとんど使わないですが、いろんなところで学んで、それを自分たちのものにして話をしていくことになります。ですから、安本さんの中ではある種の一つの考え方があって、その中からいえばこうだなという話だったと思います。が、たとえばここでいう、アクション・シンキング・チームワークという経済産業省が唱えた、産業界から必要になるような能力という意味でいわれたものですから、これに対して大学側からいえば、どうなんだということはしっかり問い直されなければならない。

あかんな、私は司会だった。このへんはおそらく会場の皆さん方からも意見が出てくるところかなと思います。一つは社会人基礎力との関係はどうか。もう一つは専門性、それと実践的な参加型のプロジェクトは絡んでくる。そのへんについて実感はどうでしょう。こういう科目はジェネラリストを目指すのか、スペシャリストを目指すのかという議論がなされますが、皆さん、実際に活動している立場からみたら、どんな印象を受けていますか？

北村　大学に専門はいらないのではないかという言葉をいただいたことに対して。言ってませんか？　すみません。

個人的にプロジェクト・ベースド・ラーニングと普通の授業との違いは、チームワークの必要な度合いだと感じました。例えばプロジェクトをやっていて、私だったら政治が専門で、他のメンバーはマーケティングが専門で、どちらも、ゼミを本格的にやって論文とか書いているメンバーだったので、「プロジェクトにくる前に学んだマーケティングの考え方からすると、こういう分析の考え方をしたら役立つから使ってみて」とか、「僕は政治にいたので、使ったら危ない表現、政治的な議論はメディアには向いていない」ということとか、それぞれが専門性を持ち寄ってこそ、いいチームになるのではないかと、在学生としては思いました。

安本　私もそうだと思います。よくプロブレム・ベースドとか、プロジェクト・ベースドと二項対立が生まれますが、対立ではなく、どちらも相互する。チームの一人ひとりの専門とかレベルが上がれば上がるほど一つのプロジェクトやチームの質の幅もどんどん上がっていくと思います。たとえば一つの政治を支配する。何々省とあるのも専門分野の方がついておられて、同じ意思を持って一つの目標を目指して国をよくしようと動いているものなのかなと思うので、切り離されるものではなく、相乗効果で動いていけばいいのではないかと思います。その意味で専門を一人ひとり持つことは大事で、きっと大学教育の中でも専門学科とプロジェクト型のものが組み合わさっていけばいいのかなと思いますが、皆さん、どうですか？

山田　司会、いらんね。

三宅　プロジェクト科目でびっくりしたことが、他学科、他分野の人と共同する機会がこれしかなかった気がします。私の専門は国文学でしたが、共同でやる機会がなくて卒業論文も自分で探して問題解決するところで、ある意味、プロジェクト科目は、専門の勉強を活性化するものであったのかなと思います。

松本　その一言が最初の発表の中にあったら、こんな質問はせずにすんだのに。私がいった瞬間、シーンとして、圓月先生も「あんなこと言って」みたいな顔されて。最初に、そういうことをおっしゃってください。

海老原　穏便に終わらせようとしないで。

松本　深追いしない方がいいかなと。この辺でちょっと矛をおさめようかしらと。

山田　ここは過激にどうぞ。

海老原　もう少しいいたいですよね。確かに大学教育の問題は同質性だと思うんです。偏差値が同じくらいで、学部、学科、専攻も同じという、穴の中にいることが問題です。法学部で法律を考える人は、時代や社会と法律が相関していくものだから、時代や社会を知らないといけない。だから、リベラルアーツのような力が必要になる。専門を磨くために、リベラルアーツが必要なのだと思います。だけども、そのリベラルアーツというのは、松本さんのおっしゃった「社会人基礎力」だけではないと思っているんです。あまりにもプロジェクト科目が今、「社会人基礎力に寄りすぎていないかなというところが、僕は松本さんと同じ意見ですね。

松本　ちょっと、アレッと思うところがいっぱいあるんです。たとえば一歩前に出る力。たとえば、ですよ。皆が一歩前に出たら世間が狭くてしょうがないですよ。一歩前に出たら一歩引く力があってもいいのに、なんであいう言い方をするんだろう。なぜ社会人基礎力で皆で一生懸命、チームワークをつけようといったって、チームワークじゃ、どうしようもない場面が出てくるわけですよ。逆にいうと社会人基礎力に寄りすぎている大学は恐くてしょうがない。一歩前に出たら一歩引いて俯瞰する、客体視できる力がほしいのに、どうして皆、一緒に「社会人基礎力」と唱えて、一歩前に出てしまうの、といつも思っていたんです。

山田　今おっしゃっていたようなところは、皆さんのワハハという笑いの中に、実は共有されているんでしょうね。つまり社会人基礎力でいわれている尺度、評価尺度が、どうも少し範囲が狭かったり、あわなかったりする部分を皆さん方もお感じになっているので失笑されたのだろうと思います。一体、どういう形でとらえていけばいいかとなった時に、学生たちがいろんな言葉を出してくれるわけです。実は私たちも試みています。実際にこういう分野に関していえば、明確な評価尺度が設定されているわけではありません。その指標はどんなものかということも全く見定められていない分野だと思います。しかしそういう指標がどれくらいあるかを、まず出してみる。こういう時にはこんな指標で評価できる。こういう指標を頼りにしていったらうまくプロジェクトが推進できるのではないかという、そんなことも大いに考えていって議論したいと思います。その時に頼りに思っているのは学生たちの言葉です。実践の中で出てくる忍耐力とかも、何となく社会人基礎力コーナーにいっちゃうと、ストレスコントロールという横文字になるんですね。その時、うーん、ストレストロールってどういう感じ？　学生たちがやっていく中で感じている忍耐力との、ずれみたいなものをしっかり見据えていくことも大事なのかなと思っています。

「人と人とのつながり」なんていう、これ、ものすごく言葉にしたら、めちゃめちゃ一般的じゃないですか。一般的なところに落とそうと思うと、こういう言い方になるかなと。実は学生たちはこれに至るまでにめちゃめちゃ喧嘩をして、相互批判をバリバリにやっているわけですね。ギリギリのところまでいって、でもやっぱりここかなと落としたところが、人と人とのつながりみたいな表現になって表れていたり、互いの支えになる「生きるパワー」といっているのも、ギリギリまで追い詰めた時に出てくるものが、こんな言葉なのだと思います。私は常にそんな受け止め方をしていますが、その中で一つ、キーワードとしていただいた言葉があるので、そのキーワードをみなさんに投げてみたいと思います。学生の発表の中で「現場」とか「実物」とか「本物」という言葉が出てきました。こういう感覚は、日本の大学教育の抱えている学生の意欲を引き出したり、何ものかを総合的に考えていったりする可能性のある場、可能性のあるものとして、現場、本物、実物というものの持っている力が実際の社会の側からみればどうなのか。現場、本物というものが持っている教育力は本当にあるのか。そのあたりのところは海老原さん、松本さんのお考えではいかがですか？

海老原　いい言葉です。学生から出てきたのは評価すべきで、すばらしいと思いますよ。トヨタは、トヨタウェイの中に「現場・源流、日々これ改善」と入れていますよね。フランスのトヨタにいっても現場・源流で、フランス人はそういうことをやらない人たちなのにフランスのCEOが、菜っ葉服着て工場で現場・源流といっているんですよ。「それはもうちょい、ベタな、もうちょい突き刺さる言葉にしてもらうと何ですか？」とトヨタの人に聞くと、こういうことを言われました。現場にいくと「クロス視点」が生まれる。その場にいる相手の人を、こっちから見ていくのではなく、向こう側の視点に立って立つ見る力が生まれる。そう、「クロス視点」です。もう一つが「成果志向」になる。これを組み立てて売れるのか、これを組み立てて、現実にラインに乗るのか。リアルな場にいるから、成果志向が宿るんでしょう。現場というのは、そういうものを生み出すような、とてつもない教育機関だと思っています。

松本　私も現場・実物・本物という言葉は刺さっていました。なぜかというと、学びの場にはこれがないのだろうかと。もう一つ、もっと引いたところで、今の学生さんたちの生活には現場や実物も本物がないのかと思ったんです。つまり親が働いているのを見たことがない。バイトをしたこと

はあるけど、バイトはバイトであって、そこで働くことの苦しさや大変さ、充実感はないんだろうかということがひっかかるんです。現場・本物に触れることによって学びが実質を伴ったものになる、それは本当だと思います。私自身、法学部法律学科でしたが、私の時代にはPBLはなかったですが、裁判所に行って「なるほど、私が学んでいるのはこれか」と思った時、初めて実物感を味わいました。私の時代は貧乏が身近にありました。法律がどこから生まれてくるのか、どういう人に必要なのか、普通の日常生活の中でわかるんです。今の学生さんは恵まれているなというのと同時に気の毒だなという、あの言葉を聴きながら別の感慨を持って感じていました。その意味では現場・本物を学ばせなければならない時代になったのだと実感しました。

山田　プロジェクト科目の元受講生、現受講生、どなたでも結構ですが、今のご指摘を受けながらいかがですか？

中谷　現場から学ぶこと。もちろん自己満足の活動に終わりたくないということは常に掲げていたことで、発信した相手から受けた反応とによって、1年目だったら2回目のコンサートはどうしようとか、応用したこともありますし、京都市に提案したということで自分たちの活動を社会に投げかけたらどういう反応を得ることができるかを、身をもって体験しました。答えになっていますか。

山田　奥ゆかしく答えてくれました。他にどうですか？

安本　現在、恵まれすぎていて裕福になりすぎているから、今までだったらほしいものが食べられなくて、住みたい家に住めなくて、仕事につけへんということがあったからこそ、身の回りに現場とか現実があったのが、社会が発展してきて、だんだん下手に裕福になっているから、それが見えなくなってきたから学びが必要になったのではないかということを思います。チームとか人とのつながりというのも実際、個人主義が増えていたり、個人行動が増えていたり、実物ではなくゲームとかネットの情報に流されているということとか、それに浸ってしまっている状況が学生の中に多いので、ここの大事さを再認識しなければならない状況が生まれてしまっていると思います。わざとあえて名前をつけて科目にしなくても、それができている国、地域や人たちはたくさんいるかなと思います。失われつつあるし、大事なのに気づかないままに忘れてしまいがちやから、思い出さないといけないし、必要な力なのかなと感じますが、どうですかね。

松本　上手にまとめていただいたので、このへんで終わりにしたいと思いますと挨拶したくなっちゃいますが。貧乏って、たまたま出しましたが、こういうふうに火をつければ学生は火がつくんだ。うまい仕掛けをすると学生にうまく火がつくんだという証左の一つだと思います。逆にそういうのをやらなくても燃える学生もいるということで、今の時代だから余計に必要なのかどうか、実証するものはないんです。が、他者性のなさといったらいいんでしょうか、人とのつながりがないんじゃなくて、皆、何を言わなくても、今の子どもたちは回りの人たちが推察してくれる。単語だけでコミュニケーションがとれる。ところが実際は、言葉の通じない人がこの社会にはたくさんいる。だからその人たちと意思疎通を図るためには、たくさんの知恵を駆使しなければならない。そういう現実を気づかせるためにも PBL は有効かもしれないなと考えていました。回りくどい言い方ですが。

海老原　ちょっとうれしいですね。中谷さんの話を聴いていて、だんだん成長されているなと思ったわけですよ。成果志向が根づいてきている。たぶんそれも、現場の力、現場というものの「教育の力」のおかげだと思います。どうやったら、それをもっと受け入れられるのか、喜んでもらえるのかという成果志向が根づいていると思うんです。教室の中では芽生えなかったものでしょう。それはOK。ここから先は教育関係者の方にぜひお伝えしたいです。それをさらに伸ばしてあげて正確な方向に向けていくのが教育関係者の役割です。でもリベラルアーツの難しさは、それをメソッドに落とすところが難しいんです。ここを乗り越えてほしいと思います。北村君の発表で新聞をつくった、ラジオで何回番組をつくった。これは一つの成果だけど、マスターベーションですよ。それが受け入れられたかどうか、目標とした掲げた成果が獲得できたかどうか、それが成果志向ですね。それを助長するようなメルクマールをつくってあげるのが教育だと思っています。アンケート調査をやる。そんなんじゃだめです。そんなものは死んだ「指標」です。「学生が面白いと思ってくれたら」なんてのも意味ないです。たとえば僕が教授だったらこんな設定をします。「お前、学生しか知らないこと、新聞記者が気づかないこと、たくさんあるだろ、それを集めて、新聞記者にむけてプレスリリースしろ。面白ければ、新聞記者が毎回来てくれる。1カ月に1回、一年で12回開いて、新聞記者が12回残ってくれたかどうか。1年後にちゃんと来てくれたならお前の勝ちだ」。こんな課題があれば、面白くない新聞は出さなくなる。新聞の中にちゃんとした情報が入るかどうか、成果志向がさらに根づく。こういうことが教育に求められることだと思いますね。

山田　どう？

松本　どんどんシンとしてきましたね。

北村　実際、田原先生からプレスリリースのお話をいただきました。いくつかやってきたことの中に、新聞をつくる時、大学祭の時に舞妓さんに同志社大学に来ていただいて、それを写真にとって記事にすることをしたんですが。本当の舞妓さんが一般に出てくることは珍しいからぜひ新聞社にプレスリリースしたらいいじゃないかと。残念ながらそれまでにやることが多すぎて、できなかったんですが、お話を聴いて、そういうことができてなかったんだなと色濃く感じました。

海老原　それは君の責任だけじゃなくて、先生に求めたいと思う。そこまで学生に求めたらむりだ。だからこっち向いて話したんです。

山田　振る役だと思っていたら答えないといかんようになってました。今おっしゃったところは重要なポイントだと思います。教育としてPBLのクオリティを上げていくために何ができるか。クオリティが上がるというのは成果主義の中の成果を上げるという意味ではなく、自分の活動の結果として、プロセスの結果として、こういうものが見えてくるというところまで引き上げていく。それが実際に自分自身で正確に自己評価の精度が上がってきて、その評価の実際の形として発信できるところまで持っていかないといけない。そこまで持っていくためにどうするか。仕掛けとか、教育の方法とか、環境が必要になってきます。現場というのをリアルと、あえて表現すると、今の大学教育の中に求められているのはリアル感だと思います。普通の講義でもリアルな講義、リアルなものを感じさせるような講義でなければ学生はついてこれないところがあるわけです。PBLの場合は余計にそういうものがあるわけです。しかしながら決定的矛盾です。教育とはリ

アルなのか、フィクションなのか。教育はフィクションなんです、根本的に。学問も研究も。リアルとフィクションのせめぎあいですね。学生が現場へ出掛けていきますが、たとえば、インターンシップで「3週間体験しました。大変ですね、会社って」「いい経験になりました」となってしまうと、どうしようもないわけです。リアルなところに無防備なままボーンと突っ込んでいくだけなんです。仕掛けも何もない。我々がやらないといけないのは社会の縮図として、こういう科目をつくっていく。そこに公募制で学外の先生方が直接、教える。さらにそこに学生が入る。そこにあるのは小さな社会なんですよ。小さな社会というフィクションを科目の中につくってフィクションであるがゆえに活かされるものをつくって、そこを通してリアルな社会に出ていくという、その往復運動を繰り返していく中で学生は成長していくんだと思っています。社会が、実学志向なリアルなものをというから、私たちもリアルなものをやりましょうといっても、それは、そう簡単ではない。それは多分、教育ではないんですわ。そういうことを、もう一回考えてみてもいいんじゃないか。そこがひょっとした社会人基礎力といわれている部分との大きな違いなのではないかという気もしたりするわけですね。司会者としては。

フロアの皆さん方に。今日、たくさんいいキーワードをいただいていると思います。ピンと触れられたものもあるのではないかと思いますので。フロアに振ってみたいと思います。

会場　山田先生に絡めて3点ほど。白熱授業でサンデル先生が政治哲学を語り、山田先生がおっしゃったフィクションとリアルを学生の目の前で考えさせ、すごい手法だということになってきました。私のように専門を教えている人間にとって、なぜ、大学の先生がPBLのような手法を自分の授業の中にとりこんでできないのか。アメリカの大学で、イントロダクション・インターナショナル・リレーションズの中にPBLは入っている。エキストラポイントで学生は行くんです。そういう仕掛けをつくらなくて、企業の方、ノウハウを教えてくださいとだけでは社会人基礎力はできるかもしれないけども、専門で活かせるものができるのかというところに、今日の話を聴いていて、日本人の教員に対する力の欠如を教えてくれました。リトルチャローをやられた東大の先生とこの間、酒を飲んでいたら「大学が悪くなったのは大学という封建制度を、一回ぶっ壊さないといけない。今の教員は八百長はしていないが、申し訳ありませんでしたといって、もう一回、出直す覚悟がないとだめなんだ」といわれました。『中央公論』が毎年2月に企画している大学特集で、2010年は「大学の敗北」、今年は「大学の耐えられない軽さ」というタイトルで、立花隆さんが双方性を持った授業をやることが重要だと言っています。もう一回、日本も1945年、原爆が落ちたように教育改革をしないといけないといっていることについて、パネリストの意見をお聞きしたいと思います。

山田　大分、大きな爆弾が落ちましたがが、まずは海老原さん。

海老原　おっしゃる通りです。あの特集の立花さんの次に僕が書いているんです。それは学問の領域の中にあります。あるんだけど、すごく旬なネタがたくさんあるはずなんです。法学部の人なら「裁判員制度が始まるけれど、あれ、なんでやる必要があるの」と考えさせるだけでも十分だと思います。法学の凝り固まった立場からすれば「必要ない」と思われる可能性は高いけど、しばらく考えると、光母子殺害事件で橋下さんが「裁判官の論理は社会から外れている、ドラえもんが出て、どうのこうの、こんなものが裁判の中で語られるている現状を見れば、明らかに法曹界は社会から外れているじゃないですか」という提言を、ワイドショーでやっているわけです。そのワイドショーで見ていた人は彼の言葉を聴いているわけです。こうやって旬な話題、お茶

の間の話題を取り上げて専門の中でやれば、相当なサンデル形式になると思います。政治学、経済学だって、あるはずです。ワイドショーのネタ、新聞のネタ、日刊ゲンダイのネタを集めてきて、法律、文学、経済に割り当てると相当なネタが入っている。専門以外の第三者の話も入っているから、それをやればいいんじゃないか、これが簡単なサンデル流の取り入れ方だと。そうでないと今の教員には確かに難しいのではないかと思っています。

山田　面白いですよね、サンデルさんがいっているのも、講義というフィクションの中でリアルなものをやっているわけで、リアルさを、どう取り込んでいくことができるかという、一つの試みでもあります。あかん、コメンテーターになってしまった。松本さん、お願いします。

松本　専門はいらないのかとか、学びなんだから、どうやって学びに返すかというのは、突き詰めていくと、そこにいっちゃうんですよ。なぜ授業の中にPBLが入っていないのか。ここはなんでセンターであって授業の中でやっていないのか。それは「大学の実力」という、とんでもない、面倒くさいことをお願いしている立場からは言いにくいのでガマンしていたんです。やっていらっしゃる方はいる。やっていらっしゃらない方もいる。大学を見ていても、それだけです。やっている人はやっています。授業の中で。ここまでやっているかというくらいに。でも、やっていない方もいる。これがFDというものの限界だろうなと思うんです。そこが大学としての体制もそうですが、どう学生を思うか、どう社会と渡り合うか、どう自分の学問を愛しているかの違いなのかなとも思います。いろんな方の授業を見ていて「大学全体でこの授業を活かせばいいのに」と思うこともあれば「ここまでつないじゃうか。すごいな」と思うこともあるので、この違いはどこに起因するのだろうと思います。日本にもサンデルさんはいます。サンデルさんは残念ながら、その大学の中で浮いているんです、ここが辛いところ。サンデルさんは「見てよ、私の授業みてよ」といって来てもらうんだけど、誰も真似してくれない。ここまでそっくりです。なぜ日本のサンデルさんは日の目を浴びないのか。これは私の次のテーマです。

山田　そう思いましたよ。サンデル、ヤンデル、シンデルといってね。ヤバイな、と思って。それはそれとしまして、いくつのもキーワードが出てきました。今の話は別に大学教育だけではないですね。小学校の教育でも同じようなことがあって、教科の学習と生きる力とか、そっち系のものが、うまくあわないという現状があります。総合学習の時間と教科の学習がお互いにケンケンガクガクなっちゃう。その間をどうつなげるの、とか。小中高大を越えて、なおかつ会社、企業、政治のところまで一緒ですよね。専門とジェネラルを、どうつないでいけるか。縦、横、どう連携させていくかは実は日本の社会の隅々に至るまで大きな課題だと思っています。ただそういう中に学生が出ていくわけですから、その時、学んだことは一体何だったんだろう。それが、生きる力、みたいな、自分たちの学び方というか、やり方を学んでいるのか、それともその中の一つひとつの知識を学んでいるのか。そのへんを率直に学生さんに最後に聴いてみたいなと思います。

三宅　2種類、両方あると思います。PBLの授業を受けた中でスキルがついたことは現実です。これを自分だけで止めたくないと。それで勤めている大学の学生に課外活動をどう活発にしていくかを利用できたらなという。両方あると思います。

安本　私自身も、どちらもあると思います。私がPBLを通して学べたのは、これからも活かしていきたいと思うところは、この学びは大学の私たちだけが自己満足のためにやってよかった、で終わりではなく、自分の考えをまとめる、チームで動くとか、そのやり方ができる人が増えるといいんじゃないか。そこを増やしたいなと。リアルとか、現実とか、海老原さんの意見ですごいなと思ったのは、僕やったら新聞記者が気づかない学生の考えをプレスリリースするという時に、今の教育で、その発想ができる人はどれだけいるか。企業の世界で激しい生き残り争いの中で出てくる発想だったりすると思うんです。それを幼稚園、小学校、中学、高校、大学に入れるような環境になれば、そういう力のついた人材が出てきて、いい意味で国が活性するので、そういうことをやってくれる企業が増えたらいいし、山田先生のいわれたようなことを文部科学省とかに。小中高は学習指導要領に縛られているから大学に可能性があると松本さんがいわれて、そうなんか、と。中学校の現場では学習指導要領が変わるので、教え方も変えないといけない。またふりまわされるということをいっているんですが、言われたことの範囲でしかやれないという教育現場があるので「踊る大捜査線」の室井さんと織田さんじゃないですけど、やってくれたらいいのなにと思います。

北村　私は先輩方と違って、まだ学生であり、社会に実際に出たことはないので、PBLで学んだことを受けて後輩にPBLを進める時に、話していることを申します。「PBLを1年受講してみると、人と話すことが得意になるよ」と。もし自分が勧めている後輩が「いや、僕、人と話すのが得意ですから」といえば、「もし、そうならチームに所属して苦手な人を得意にさせてみてくれよ」といいます。人と関わって行く力、そのための形式、つまりはマナーが身につくから、ぜひともプロジェクト科目、どのテーマでもいいからやってみてほしいと言います。後輩が、人と関わって行くことに積極的になっていけば、大学生の間に人の輪も広がって、就職活動でも広い視点が持てるのではないかと思います。

中谷　私も社会に出たことがないので大学生の立場からの発言ですが、スキルと知識を両方学ぶことができました。1年目のクラシック・プロジェクトをとったのも3歳からピアノを習っていて、趣味といいながら精一杯頑張ってきたことや、今までの知識を活かせないかなと思ってこのプロジェクトをとったんです。クラシック・コンサートを企画して、こういう反響をえることができたんだと思います。先週、自分のリサイタルを一から企画して、クラシック・プロジェクトで得た知識、スキルを活かして自分の趣味でもコンサートを企画しました。映像プロジェクトでも、映像を撮る技術、チーム運営力をこれから社会人としてメディア関係に就職することに決まったので、活かしていけたらと思っています。

山田　残念ながらお時間がまいりましたので、このあたりで終わりにあたって一言だけ申し上げたいと思います。まとめる気はないです。というのは、おそらくプロジェクトをベースにした活動は

次々に局面が変わってく。次々変わっていく局面に常に対応していかないといけない学び方ということがあるのだと思います。普通ですと、ステップバイステップでいけますが、プロジェクトの場合は、今日やったから、これでうまくいくか、というとそうでもない。常に変わっていく局面を、どう皆で乗り越えていくことができるかを考え続ける。その意味では、おそらく日々、自分で歩めば、その実感が足の裏に残って、足の裏に残った実感で次の一歩を歩みだしていかねばならないというのがPBLの持っている特性だろうと思います。

局面がどんどん変わっていくがゆえに、そこにいる人間自身も、じっとしているわけにいかなくて、ものの見方もどんどんやわらかく、強くなっていかなければならない。そういう力が、ひょっとしたら大学という環境の中で、一言でいえば逆境の中に身をおいてみることで自分自身を試すことができる場が必要なのではないでしょうか。大学に求められているのは学生の中にある、そういう力、潜在力を、どれだけ引き出していけるかにかかっていて、PBLも、きっとその教育手法の典型例なんだろうと思っています。典型例があるから、これでOKかというと、必ずしもOKではありえないわけです。なぜならば時代は動きますし、社会は変化します。それに応じて私たちも変わっていきながら、でも、根っこの部分は変わらないで進んでいきたいと思います。

今日の学生の発表にもありましたが、私たちにとって目に見えないものの成長をどんなふうに私たちは見守り、育てていくことができるのか。そういう賭を、日々やっているような気がいたします。その意味では今日、ここに来てくださった方々は、そういう実験を見守ったり、立ち会ったり、自らの実践の中に活かしていこうと思って集まってきてくださった同志だろうと、私は思っています。多分、皆さん方の心の底に響くものがあったとすれば、それは学生たちの事例報告の中にあった、そういう様々なものが、おそらく皆さん方の中に響きあったのだろうと思っています。今後も同志社大学はプロジェクトを中心にした学びをどんどん押し進めていきたいと思っていますが、大学も支持してくれるに違いないと、私も信じております。信じているんですね。先がどうなるかわかりませんよ、一寸先は闇でございますのでね。

皆さん方も、色々な現場で日々、試行錯誤を繰り返しておられると思いますが、今後もいろんな機会に意見交換ができれば、すばらしいことだと思っております。本日は皆さん方の意見をもっと集約できるような、うまい司会ができればよかったのですが、学生たちの熱意に免じまして、私の拙い司会はこれくらいでご勘弁をお願いしたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

司会　以上をもちまして、シンポジウム「PBL教育における多面的評価――PBLは社会で役に立つか――」を終了いたします。皆様、長時間にわたってご参加いただき誠にありがとうございました。

「ＰＢＬ教育における多面的評価－ＰＢＬは社会で役に立つか－」アンケート結果

■第１部

１．提言『大学教育に求めるもの』は、参考になりましたか？

＜教員＞

・授業外、学外からの意見を聞く機会が乏しいので、良い機会になった
・大学と大学生の増加が大学教育と就職にどう影響しているかを考えさせられた
・リベラルアーツの必要性を感じた。負け犬意識は払拭できるという言葉に救われた
・読売新聞「大学の実力」の担当者の話が聞けたのがよかった
・現状認識を追認するデータを示していただいたこと、学生中心に組み立てていること
・社会からの分析力に興味があった、読売新聞「大学の実力」の内容を初めて知った
・企業の視点からの現状の捉え方、大学教育への提言が得られた
・社会人の視点から大学教育への提言であり、適切な現実認識に基づく内容であった
・読売新聞「大学の実力」記者・松本氏の話･･･特に学生によるオープンキャンパスの話は感動的ですらあった。以前から心の奥にモヤモヤしていたことにまとまりがついた
・リアル感が不足していることが再認識できた。必要性を伝えながら教育に携わっていきたい。大学への切り口が新しく、気づかされることが多かった
・就職状況の本当の現状を知れた、率直で大変おもしろかった
・大学の運営に危機感を持っている大学人なら概知のこと

＜職員＞

・読売新聞「大学の実力」の記者の方の提言の論議。必要とされる自分へもっていく教育方法に共感した
・海老原さんのレポートで、リベラルアーツ及びＰＢＬ教育の位置付けが明確になった！素晴らしい
・社会に直結し、かつ汎用性のある大学教育とは何か、という示唆に富んでいた
・社会が大学教育に求めるものの背景が短時間で理解できた

＜学校関係者＞

・昨年度に、ＰＢＬは初等・中等でもその成果があること、連携の重要性を示されたのに、提言のタイトルが大学に限られていた。講演者の方のほうが幅広い視点を持っていらっしゃるように感じた

＜学生＞

・大学教育を受けるものとして、参考になった
・学生の実態について改めて実感させられた
・それぞれの方の専門分野、社会的な目線でお話をしていただけた
・リベラルアーツを学ぶ手段としてのＰＢＬという考えが、とてもしっくりきた

＜企業関係者＞

・娘が当大学の２回生なので、これからの大学生がどのようなところで評価されるのかが良くわかった

＜その他＞

・視点が興味深かった

・社会との関わりを含め、主体性とは何かを考える上でたいへん参考になった
・大学教育が抱える主要な問題点を分かりやすく話された点は参考になったが、それらの問題点を引き起こす根本の問題まで掘り下げてほしかった

２．内容等についての、ご意見やご感想

＜教員＞

・「必要とされる自分」を考えさせることは確かに大切だと思った
・大学で実践的な内容を扱うべきということ、必要とされることが重要という指摘は共感できた
・学内の教育センター教員に問合せしてみたい
・知識観、学習観の構造転換の必要性について、一番認識していない、認識しにくいのが大学教員であろうと思われる。高校までの公教育は、文科省の指導要領で枠が決められているので、ＰＢＬを含めた教育課程の再構築ができるのは大学教育であろうと、私も同意見である
・第１部にも質疑応答の時間がほしかった。第２部の質疑応答も時間が短すぎる。二日間のシンポジウムになっても良いから、もっと時間にゆとりのあるシンポジウムが良い
・プロジェクトに参加する学生は放っておいても伸びていくが、参加しない者のほうが問題となることと、どのようにするのかが知りたい。学生の力は大きいことを知り楽しみが出て来た
・文系における専門科目の位置付け、存在意識はどこにあるのかを知りたかった。会計学を担当しているものとして簿記の必要性に言及していただいたのはありがたい

＜職員＞

・物事の核心を突いた内容がとてもわかりやすく、楽しんで拝聴させていただいた
・パネリストのストレートな話が良かった
・海老原さん･･･今の就職難の状況をつくったのは大学自身あり、文科省の政策なのにもかかわらず、企業に大学生をもっと採用して欲しいってお願いしているほうが勝手な言い分だと思う
松本さん･･･「必要とされる自分」というアプローチは学生にとって大切だと思う。「なりたい自分」というアプローチは学生にとってだけでなく大人にとってもハードルの高い問いかけである
・「大学の専攻は職業とつながらない」という点は看護学教育に携わっている者としては物足りなかった
・リベラルアーツの方法論がＰＢＬである、との仮説を知っただけでも、このシンポジウムに来た意義があった
・「ＰＢＬは役に立つか」がテーマなので「期待している」２人ではなく、１人は「ＰＢＬは役に立たない」人がしゃべるとより理解が深かったと思う

＜学校関係者＞

・最近の大学や学生の実態について、なんとなく考えていることと実際との違い、思い込んでいることなど改めて考えさせられた

＜学生＞

・もう少し意見したかったが、たいへん参考になった
・自分が大学生な事もあり、自分の境遇も含めて分析されているように感じた

＜その他＞

・ＰＢＬを進めた当事者のプロセスを内省した発表は好感が持てた

■第２部

１．在学生による報告は、参考になりましたか？

＜教員＞

・ぜひこのような取り組みを、できるものなら真似て自分の大学にも取り入れてみたい
・学生が自ら育つ力があることが良くわかった
・学ぶことの意義を見つけて自己評価を行って変わっていることが知れた
・学生が自主的に意欲的に取り組む力を身につけるプロセスが良く分かった
・ＰＢＬの一番高い水準の成果を見ることができた
・二人とも堂々とした発表態度だった。ＰＢＬによる教育効果の一つと思われる。その無限の可能性の一端を見ることが出来た気がする。受講学生の声は初めて聴いた
・リーダーのあり方、成長を知ることが出来た。教訓は力の入れ方、時間・労力の配分だと感じた。学生が自己を振り返って説明できていた
・学生がどのように取り組んだのかがよく分かった。具体性があった
・学生の意見がリアルに聞けた。学生のプレゼン能力が素晴らしかった
・ＰＢＬとして、どのレベルの活動をしているのかに興味があった。とても真正性の高い内容だと感心した。専門性、社会人との繋がりなど、もう少しの掘り下げが欲しかった

＜職員＞

・学生自身の声でＰＢＬの意義、成果を確認できた
・ＰＢＬが具体的にどういうものであるかを、実例を通して認識できた
・「花のキャンパスライフ」プロジェクト報告から、ＰＢＬは確かに「社会に役立つ」ものである理由が具体的に分かった。プレゼン能力の高さからもＰＢＬの効果が証明されている気がする。学生がＰＢＬ教育で学んだスキルや見出せた価値などがわかった

＜学校関係者＞

・「何を学んでいるか」よりも「どのように変容したか」に興味があった。北村さん、中谷さんともにそこに重点を置いてお話をしていただいたので興味深く聞かせいていただいた。これこそがＰＢＬの魅力であり、学生さんたちがそれに自覚的でいらっしゃることが素晴らしいと感じた
・学生、プロジェクトの違いにより特色が浮き彫りになると思った

＜学生＞

・学生が何を学んだか聞けた。成果報告会と異なる視点の報告を聞くことが出来た

＜企業関係者＞

・プレゼンの仕方で、彼らの成果が十分わかった。大学生の目線で社会に対してどのようにすれば情報を発信でき、また、社会参加ができるか、参考になった

＜その他＞

・プロジェクトを進める上で、目標を明確にし、参加メンバーで共有することの大切さを知った。今年度からプロジェクトを担当するが、まだ参加学生の顔が見えないので、どのように進めるべきか（サポートすべきか）迷っている。学生の体験談を実際にきけた

２．内容等についての、ご意見やご感想

＜教員＞

・取り組みが良かったように思う。学生が主体性を持ってやっているのが良い
・リーダーの成長する過程を、反省的思考の深まりをたどりながらの内容で、体験に基づ

く実りある報告に感動した。エピソードを基にどういうことを学んだかが良くわかった
・ここまで熱心に学べる学生は、本人たちの意欲があるからなのか。この科目の「しかけ」が優れているからなのか。両方とは思うが･･･
・初めて勉強させていただいたので、ＰＢＬのインフラについてもっと知りたい。しかし、それを自ら考え実行していくのが教員としてのＰＢＬなのかもしれない

＜職員＞
・北村さんがＰＢＬと基礎能力の関係に触れていたが、理系ＰＢＬの場合は基礎能力においてもより高いものが求められるのではないか？その点文系ＰＢＬとは同じではないと思う。ただしそれでも数理基礎能力以上の基礎能力については共通に必要になることだけは間違いない
・実践の目的を「授業だから」だけでなく参加学生自身が社会的意義を意識し、それを考えられるまでに展開できることは有意義だと思う。単にプロジェクトやイベントの実践だけでなく、そのプロセスで学生さんたちが得られたことを言語化できることは素晴らしい。ＰＢＬで習得できる能力こそ社会人基礎力だと改めて思った
・プロジェクトの成果と個人成果の評価について感心をもった
・二人とも非常にしっかりしたプレゼンテーションだった。プロジェクト科目を通して身につけられたのか？それとも普段の授業を通して身につけられたのか？
・恐らく学生さんはプロジェクトの中で悔しい思いや苦しんだことがたくさんあったと思う。そんな思いを乗り越えての成長だと思う。そんな話も聞きたかった
・同じ科目を続けて２年やることはないのだろうか。１年の反省を活かすためにもう１年同プロジェクトを運営するのも力がつくのではないかと学んだ
・発表の内容が良く整理されていた。また発表のテンポや言葉の遣い方等々とてもしっかりとしており、本学学生の手本としたいと思った。ＰＢＬの別の内容が見えた

＜学校関係者＞
・私の指導させて頂いたプロジェクトと違う面もあり、やはり個性が出るなぁと思った

＜学生＞
・とても聞きやすく、楽しめた。一点だけ言うとすれば、二人とも学んだことで目標課題設定が大切だとわかった、自己満足で終わらせないということに気づき社会の目線でものごとをすることが出来たと仰っていたが、私はそれ以上のことが聞きたかった。自己満足で終わらせないことが、どう社会に出て役立つのか、もっと奥深く聞きたかった
・映像を作ったのならば、もっと自信を持ってきちんと流すなり説明するほうが良いのではと感じた
・「学んでいたこと」と「学んだ事」の整合性が合っていないように感じた部分があった。プロジェクトの紹介、自分の紹介、成果とバラバラな面もあった気がする
・学生の初期のモチベーションの違いによる成長具合が気になった

＜企業関係者＞
・パワーポイントのシートは、揃えたほうがいいと思う。ページ数ももっと絞れる内容だ

＜その他＞
・発表された２件とも、良いリーダーを得てうまくいったプロジェクトと見受けられた。その課程でリーダーが成長することがわかった。本当に知りたかった点は、プロジェクトが行き詰まったり方針変更が必要な時に、どのようにリカバーしてきたのかという点

■第３部

１．シンポジウム『ＰＢＬ教育を考える』は、参考になりましたか？

＜教員＞

・実学の手段としてよい参考のモデルとなった。ＰＢＬの必要性がよくわかった
・大学教育として考えるべき発言があり、今後更に考えていきたいと思う
・何が、誰が、一番問題かが明確にされてよかった
・「社会に出る」時に使える経験がＰＢＬであると理解できた
・教育の目標について見直す機会となった
・ＰＢＬ教育の可能性と問題点について、実質的な議論がなされていた
・大学の視点、企業の視点、学生の視点、様々な視点からの討論は単純に楽しめた
・光の面のみが輝いていた。脱落した学生アンケートがあれば知りたかった
・議論がテーマと別の方へ流れたのではないか
・学生と教員・社会人との間の違いがよく見えた
・学生の生の声が聞けるシンポジウムのやり方は良いと思った
・提言者の厳しい指摘が非常に興味深かった
・リアルをいかにフィクションに取り組むかについて改めて考えさせられる機会となった

＜職員＞

・卒業生の報告では、現在の仕事にどう活かされているかにしぼって話してほしかった
・すばらしいファシリテーションで本質的な問題について参考になる意見を聞けた
・提言者のコメントや質問が的確かつ批判的でよかった
・時間が不足するくらいの濃い内容。提言者の方も学生・卒業生の方の貴重な意見が身にしみた

＜学校関係者＞

・提言者の方が率直に意見を仰ったので、同志社のＰＢＬがより明らかにされる方向性が示されたように思う

＜企業関係者＞

・海老原さん、松本さんの視点がストレートで鋭かった
・学生、卒業生、社会人の三者が生の意見、現場の見方や考え方が討議されていた点
・表面的で自己満足な褒め合いではなく、問題点をハッキリし、各々の意見を言える雰囲気づくりなど、パネリストと学生、卒業生の差を埋める運営がうまかった

２．内容等についての、ご意見やご感想

＜教員＞

・松本氏の考えに賛同できる。学問の価値はどこに見出すべきなのか。また成果志向という海老原氏の指摘も納得できる点がある
・時間が少し短かった。フロアーから発言ができる機会があればよかった
・本質的な問いが立てられたシンポジウムであったと思う
・学生登壇者のために問題を整理してあげたほうが良いのではないか
・専門教育でもこうした授業方式ができる方法を一般化して出してくれるとありがたい
・ＰＢＬは意欲的で自立した「学習力向上」に寄与するところ大であると感じた。新しい時代の教養教育の形であると思う

＜職員＞

・もう少し会場とのやりとりの時間があればよかった

・できれば教育業界以外のＯＢの話も聞きたかった
・学生の生の声（成果）を聞くことができて参考になった
・「教育はリアルではない」とは思わない。全てがリアルである必要だとは言わないが･･･「学生だからこそ出せる output」というものがあり、それが社会に貢献すれば、それはリアルであると思う
・ＰＢＬ教育こそ社会と連携できるものであり、さらにもっと社会へ還元できるものとなればよいと思った。大学の内容（教育）まで進み面白かった
・「学びの中で変化していく状況、局面にどのように対応し、どのように乗り越えてゆくかを考える」を学生に教えていきたいと思った

＜学校関係者＞
・後半、山田先生がスキル・知識について卒業生にお聞きになったように、やがてＰＢＬの経験者（プロジェクト科目等の卒業生）がどのように自分の「現場」でプロジェクトの仕掛け方等について語れる日が来ると、さらに大学生に要求できるレベル、身につけさせなければならない事項が浮かび上がってくるのかと期待する

＜学生＞
・意見する時間が欲しかった

＜その他＞
・プロジェクトを通して自分達がどのように成長したかが発表の中心であった。プロジェクトを通して社会にどのように働きかけ、どのような形で継続しているかについても知りたかった

■その他、ご意見やご感想

＜教員＞
・来年の企画を楽しみにしている。卒業者のコメントは特に貴重。これからもぜひ続けてほしい
・プロジェクトラーニングに取り組むチームは、プロジェクトだから、まさに会社でも部門横断的な活動となる。学部横断的な教育活動としてＰＢＬは活用できると思った。ただし、根本的に「社会のための教育」ではなく「教育のための社会」とは何か、そのためのＰＢＬを議論する必要もある
・自分の大学においてもＰＢＬ教育を立ち上げたいと思っている。いろいろ参考になった
・第１部、２部のプレゼンで、ＰＢＬとは長期丸投げインターンシップかと思った。でも第３部で松本さんが発言されたように、今の学生は法律の必要性でも肌で感じる機会が無いとお聞きして、ＰＢＬの必要性に気づかされた。どう大学が学生の気づこうとする気持ちに火をつけるのか、これから大事だと思う
・山田先生および事務所スタッフのご尽力の結果か、すばらしいＰＢＬを全国に発信していることに感服する。導入教育でメソッド教育（コンセプトのたて方、企画書のつくり方、ノート術、ＰＥＲＴ、ＰＤＰＣによる計画推進力等）が加わると更にすごいと思う
・ＰＢＬは組織として否定する場合が多いが、受け入れられるには問題が大きい
・日常の教育活動の参考になると思う
・ＰＢＬの「しかけ」についてもっと知りたいと思った
・卒業生からは「ＰＢＬは就職に」というのが若干感じられ、そこにやや不安を感じた
・文系学部学生の参加がほとんどであった。田辺キャンパスの工学部学生の参加は？
・会場の識者や参加者からの意見交換の時間が欲しかった。学生のコメントレベルが低く、成果発表としては物足りなかった。ＰＢＬ教育は今後の課題があるので引き続きこのような場を設けて欲しい

・登壇者がだいぶ本音を語っていたのでよかった
・ゼミや卒論指導でもＰＢＬ的な学びは可能なのだろうが（学問分野にもよるが）チームワークが重視される本学の科目は特色でもあり、優れていると思った。グループで研究する手法をあまり入れていない学問分野の学生にとっては卒論で身につけることが難しい内容・手法を得ることができると感じた
・大学人の一員として山田先生の「やわらかく、そして強く」そして「変わっていきながら」をいただきました
・卒業生のプロジェクト科目の活動内容の説明が長すぎ、現役学生と重複していた。むしろ卒業後にどう役に立っているかに時間配分をして欲しかった
・意味のある時間を過ごした

＜職員＞
・ディスカッションが非常に面白かった。提言者のコメントや質問が刺激的だったので、それに対する考えについては学生さんだけではなく、もっと教職員側からもお話を伺いたかった
・ＰＢＬが大事だといわれる現状、時代である事が残念。ＰＢＬを通して社会人基礎力等のグループワーク、コミュニケーション能力が身につくが、文字通り「基礎力」に過ぎない。それがあるからといって競争に必ず勝てるわけではない。できれば１・２回生でその段階を通過して、４回生はもっとご自身の専門に打ち込んで、個人の能力を上げられるような時代になればいいと思った

＜学校関係者＞
・学生が現実に出会った後どう変化するのか？正直まだ見えてこない。

＜学生＞
・プロジェクトを何のためにしているのか、私はそれをもっと知りたいと思った。
目標課題設定が大事、自己満足で終わらせない、それは基本だと思う。なぜこれが大事なのか、どうして大事だと気づいたのか、そこから自分が見る社会や人とのつながりは何なのか、人と関わる上で何を学んだのか、もっと深く聞いてみたかった
・非常に参考になった。また参加したいと思う

＜企業関係者＞
・素晴らしいメンバー、内容だった。ＰＢＬが学生の成長にこれだけ貢献出来ることを実感し、信じている
・またこのようなシンポジウムがあれば連絡を頂けたら大変ありがたい
・タイムマネジメントをもう少しして頂ければ･･･

＜その他＞
・教育は難しい！３８年ぶりに学生に戻ってつくづく実感している。私のように社会での仕事を終えた者がどのように若い学生たちの教育に携わっていけるか、４月から担当するプロジェクト科目で模索してみる。私が目標とするのは、今後５０年を生きる学生たちに、将来出会うであろう諸問題に対して多面的な情報を得、整理して、自ら考えて自分の意見を模索する能力をつけること。これが少しでも達成できれば、プロジェクトが途中で終わっても大成功

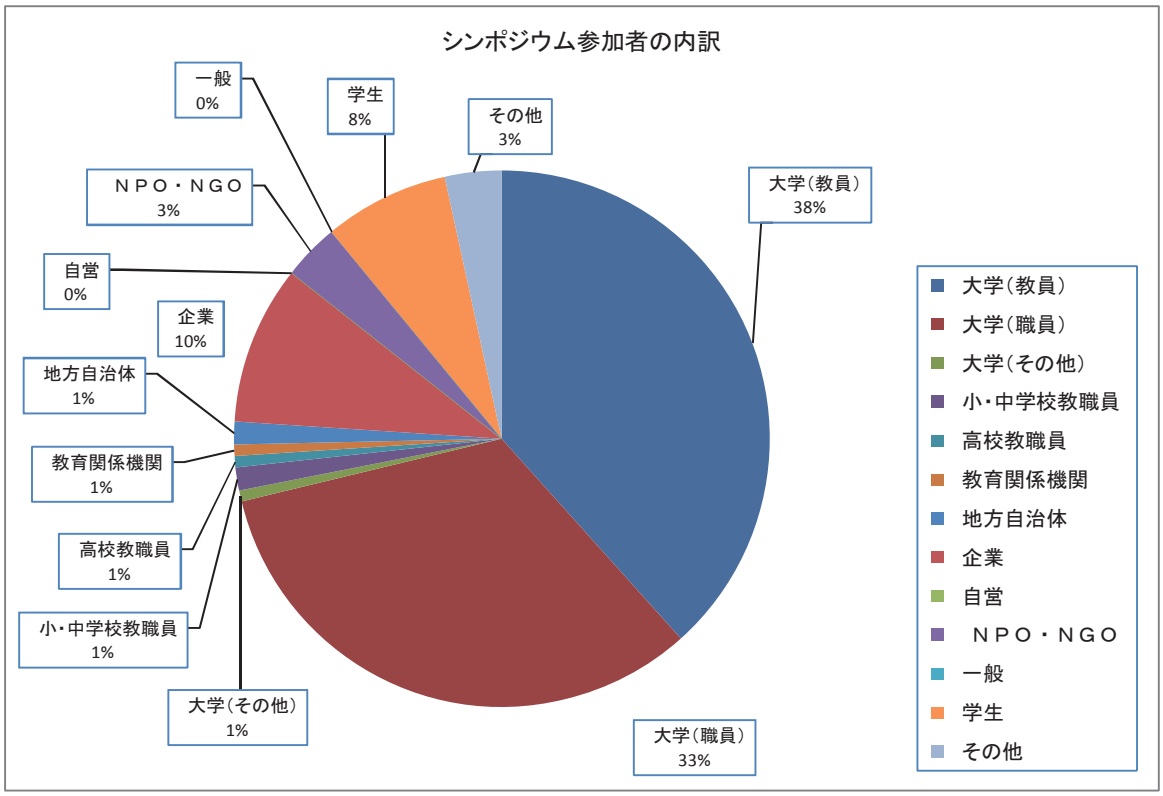
文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムシンポジウム

「PBL教育における多面的評価-PBLは社会で役に立つか-」

ー　アンケート結果について　ー

●シンポジウム参加者の内訳

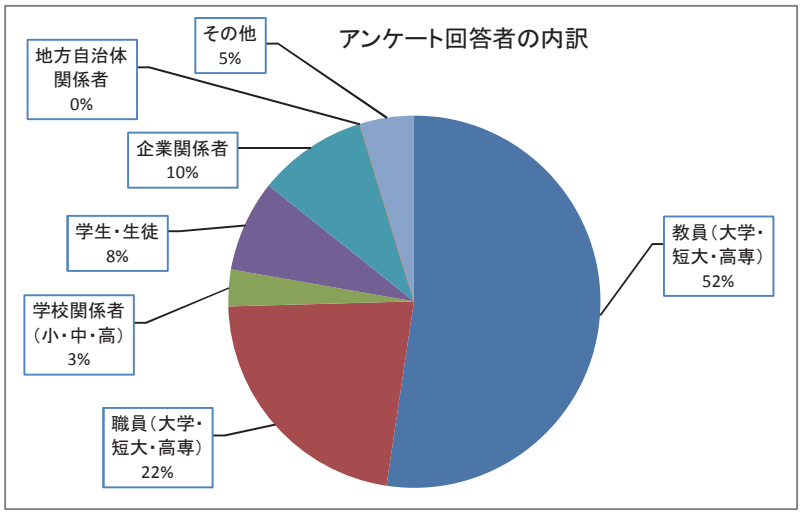
所属	人数
大学（教員）	56
大学（職員）	48
大学（その他）	1
小・中学校教職員	2
高校教職員	1
教育関係機関	1
地方自治体	2
企業	14
自営	0
NPO・NGO	5
一般	0
学生	11
その他	5
合計	**146**



■アンケート結果について

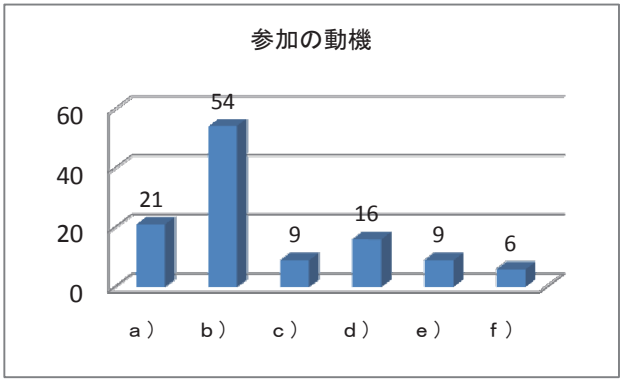
●アンケート回答者の内訳　※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約53%(本学関係者を除く)でした。

所属	人数
教員(大学・短大・高専)	33
職員(大学・短大・高専)	14
学校関係者(小・中・高)	2
学生・生徒	5
企業関係者	6
地方自治体関係者	0
その他	3
合計	63



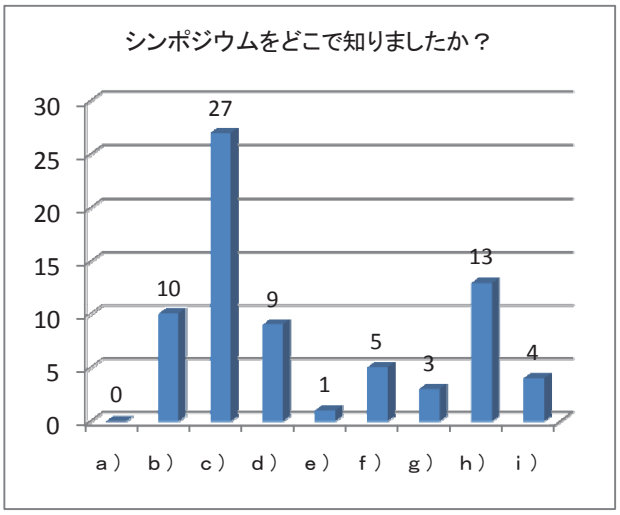
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 人材育成に興味があった	21
b) PBLに興味があった	54
c) 関係者から勧められた	9
d) 大学生の活動に興味があった	16
e) 地域連携の活動に興味があった	9
f) その他	6



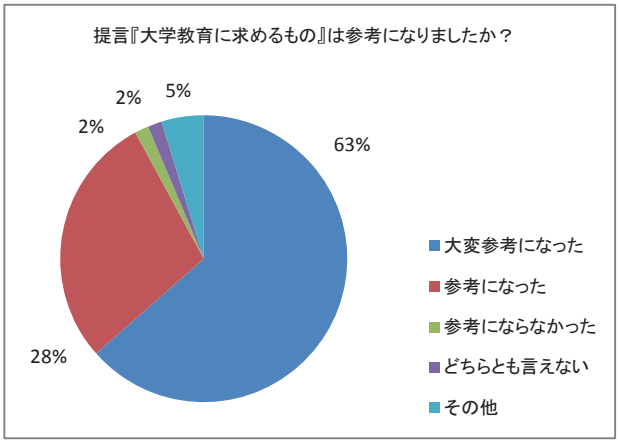
●シンポジウムをどこで知りましたか？(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか？	人数
a) 新聞広告	0
b) 同志社大学のホームページ	10
c) 案内パンフレット	27
d) 学内のポスター	9
e) 学外のポスター	1
f) メーリングリスト	5
g) 文部科学省ホームページ	3
h) 関係者に勧められて	13
i) その他	4



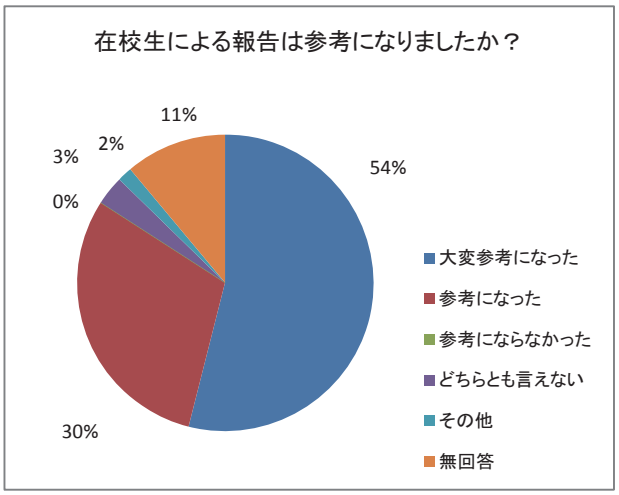
●第1部　提言『大学教育に求めるもの』は、参考になりましたか？

提言『大学教育に求めるもの』は、参考になりましたか？	人数
a）大変参考になった	40
b）参考になった	18
c）参考にならなかった	1
d）どちらとも言えない	1
e）その他	3



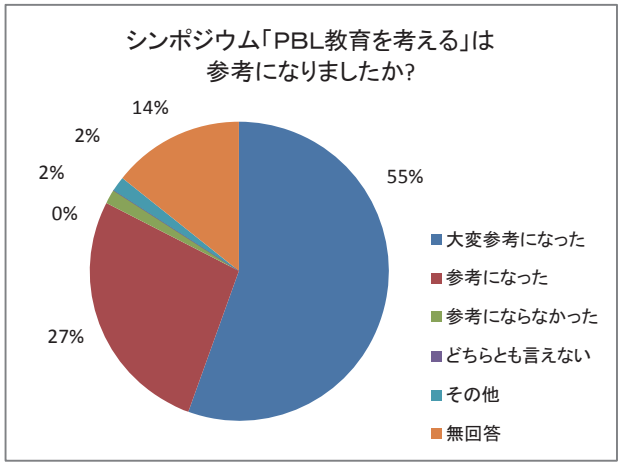
●第2部　在校生による報告『プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか』は、参考になりましたか？

在校生による報告「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」は、参考になりましたか？	人数
a）大変参考になった	34
b）参考になった	19
c）参考にならなかった	0
d）どちらとも言えない	2
e）その他	1
f）無回答	7



●第3部　シンポジウム『PBL教育を考える～提言者・在校生・卒業生の視点から～』は、参考になりましたか？

シンポジウム「PBL教育を考える～提言者・在学生・卒業生の視点から～」は、参考になりましたか？	人数
a）大変参考になった	35
b）参考になった	17
c）参考にならなかった	1
d）どちらとも言えない	0
e）その他	1
f）無回答	9



文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム
同志社大学 PBL推進支援センター 2010年度 第2回 シンポジウム

PBL教育における多面的評価

ー PBLは社会で役に立つか ー

2011年
2月26日(土)
13:00〜16:30

同志社大学
今出川校地 明徳館1番教室
京都市上京区今出川通烏丸東入
京都市営地下鉄烏丸線今出川駅下車

先着150名
入場無料

挨拶 **土田 道夫**（同志社大学 副学長・法学部教授）

第1部 **提言「大学教育に求めるもの」**

海老原 嗣生
（株式会社ニッチモ 代表取締役）

松本 美奈
（読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者）

第2部 **在学生による報告**
「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」

第3部 **シンポジウム**
「PBL教育を考える ～提言者・在学生・卒業生の視点から～」
【司会】同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授　山田 和人

申込 メールまたはFAXにて先着150名受付 詳細は裏面　締切 2011年2月21日(月)

主催 同志社大学 PBL推進支援センター（京都市上京区今出川通烏丸東入 京都市営地下鉄烏丸線今出川駅下車）

同志社大学

問合先：教育支援機構教務部教務課　TEL.075-251-4630　FAX.075-251-3064　e-mail.ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp
http://www.doshisha.ac.jp/academics/activity/sympo110226.php
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/
http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/

同志社大学 PBL推進支援センター

今出川キャンパス 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 今出川校地弘風館1階 教務課内
TEL：075-251-4630　FAX：075-251-3064　E-mail：ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

ホームページもご覧ください http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/